

特別支援教育研究論文集

—令和6年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

外国につながるのある特別なニーズのある児童の就学前後の取組
—就学前に何ができるか、就学後どのように支援を届けていくか—

可児市立今渡北小学校

研究代表 教諭 曾我部 法子(特別支援教育コーディネーター)

教頭 高原 美乃(特別支援教育加配教頭

令和5年度まで)

教諭 肥田 理佳(国際教室主任)

教諭 中林 紀代(特別支援学級主任)

教諭 美登 綾(特別支援学級担任)

令和7年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

目 次

要旨	1
第1章 研究の背景と目的	2
第1節 研究の背景	2
1 岐阜県可児市立今渡北小学校について	2
2 可児市の特色ある取組～初期適応指導教室「ばら教室KAN I」～	2
3 可児市立今渡北小学校の児童の現状	2
第2節 研究の目的と方法	3
1 研究の目的	3
2 研究の方法	4
第2章 校内支援体制の整備	6
第1節 校内支援体制の見直し	6
1 校内教育支援委員会の見直し	6
2 職員の専門性の向上	8
3 国際教室担当者と特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任との連携	8
第2節 外国につながるのある児童の実態把握	12
1 アセスメントによる実態把握	12
2 外部機関との連携による実態把握	16
第3節 連携協議会の開催	17
1 オンラインミーティングの概要と協議内容	17
2 協議を経て広がったこと	17
第3章 国際教室の実践	18
第1節 国際教室に通う児童への就学前の取組の実践	18
1 はじめに	18
2 実践の内容	18
3 実践の成果と課題	22
第4章 特別支援学級の実践	23
第1節 外国につながるのある児童におけるスヌーズレン教育の実践	23
1 はじめに	23
2 実践の内容	25
3 実践の成果と課題	31

第2節 特別支援学級に在籍する外国につながるのある児童への学習支援	32
1 はじめに	32
2 実践の内容	32
3 実践の成果と課題	36
第5章 研究の成果と今後の展望	37
1 研究の成果	37
2 今後の課題・展望	38
引用文献・参考文献	38
謝辞	39
巻末資料	40
・資料1 校内教育支援委員会の位置付けと役割の変化	
・資料2 ①専門性の向上の取組 職員全員で特別支援教育に関わるために取組	
②専門性の向上の取組 特別支援学級担任・発達通級指導教室担当の専門性の向上の取組	
・資料3 検査の特徴と実施状況	
・資料4 連携先と連携内容	
・資料5 2023年 1年生対象の判定テスト	
・資料6 2024年度 新1年生対象 就学時健診 日本語力調査 試作版	
・資料7 2024年度 新1年生対象 就学時健診 日本語力調査 完成版	
・資料8 日本語力調査 実施要項	
・資料9 日本語力調査 記録用紙	
・資料10 外国籍児童生徒コーディネーターからの情報	
・資料11 国際教室（日本語1）のカリキュラム 活動例	
・資料12 J S L 評価参照枠のステージを参考にした児童の実態	
・資料13 「ことばのたつじん」の1時間の流れ	
・資料14 「ことばのたつじん」の時間の子どもたちの様子	
・資料15 学習の記録を残すカード	

要旨

我が国に在留する外国人は2021年の年度末で約276万人、外国人労働者は約173万人で過去最高となっている。

2022年度 文化庁日本語教育大会の「外国人児童生徒等の現状と課題」によれば、公立学校において、日本語指導が必要な日本国籍児童生徒は約10年間で1.7倍、日本語指導が必要な外国人児童生徒は約10年間で1.8倍増えている。外国人の子どもたちが将来にわたって日本に居住し、共生社会の一員として今後の日本を形成する存在であることを前提に「誰一人取り残さない」という発想に立ち、支援体制を整えていくことが求められている。

可児市には現在9,730人の外国人が住み、年々増加傾向にある。市としては外国人児童の不就学ゼロを目指し、取り組んでいる。今渡北小学校は約1,000人の児童が在籍し、県内でも1、2を争うマンモス校であり、外国につながるのある児童数も3割近くが在籍するいわゆる外国人の集住地区である。

ここ5年くらいの間外国につながるのある児童数の割合も増加しているが、それ以上に特別支援学級に在籍する外国につながるのある児童数が急激に増加している。外国につながる子どもたちでつまずきが目立つ場合には、母語の学校文化や子育ての文化等の文化的背景が異なり、日本語のコミュニケーションも容易でない場合が多いことから、どのような支援が必要かを保護者と教員との間で理解を共有することは困難を極める。こうした外国につながる子の子つまずきについてどのような支援をすすめていくかが課題となっている。

このような現状の中、職員にアンケート調査を行ったところ、外国につながるのある児童に指導を行った教職員のほぼ全員が困難さを感じながらも、支援を工夫したり、配慮したりしていることが明らかになった。

この結果を受けて、以下の2点について、外国につながる児童に関わる国際教室担当者、特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任、管理職がそれぞれの立場から支援を行った。

- ① 就学前の外国につながるのある児童の実態を把握するために、関係機関と連携し、実態把握方法等について整理検討した。(国際教室担当者と特別支援教育コーディネーター)
- ② 小学校1年生時から特別支援学級に在籍する児童にアセスメントを実施し、具体的な指導・支援内容について事例研究を行った。(特別支援学級担任)

この2つの実践を通して、支援のキーワードを「アセスメント」と「連携」と考えた。小学校就学前に外部組織と連携し、適切なアセスメントをすることで、早期支援につなげることができた。また、小学校入学後も、適切なアセスメントを行い、校内連携を図ることで、学習環境を整え、個に応じた支援を行った。それによって個々の成長を促すことができた。

「この子は、知的にゆっくりであるために起こるものなのか、言葉の問題なのか」を判断することは難しい。けれどもその判断が遅れると外国につながるのある子どもの自己肯定感が低下するなどの二次障害を生じてしまうことも多々あることを感じている。

今後も的確なアセスメントの方法の模索と実施、校内や外部連携の強化を図り、外国につながる子どもたちへの包括的な支援の充実に力を入れていきたい。

キーワード：アセスメント 連携 特別支援教育 国際教室 入学前後

第1章 研究の背景と目的

第1節 研究の背景

1 岐阜県可児市立今渡北小学校について

可児市の北を流れる木曾川近くに位置する今渡北小学校は、1983年4月1日、今渡南小学校から分離し、今渡北小学校として開校し、42年目を迎える。児童数が2024年度、初めて1,000人を超えた県下でも1、2を争うマンモス校である。近くに自動車部品などの大きな工場が複数あり、ここで働く人たちの子どもが多く通っている。工場は3交代制のため、夜勤ができる労働力として外国人が多く就労している。

2024年度1月現在外国につながりがある子どもが263名在籍している。約200名がフィリピン国籍、60名あまりがブラジル国籍である。中国国籍など他の少数の国籍の児童もいる。可児市の外国籍児童生徒数が、10年前に比べ、約2倍になっている。それに伴い、今渡北小学校の外国籍児童数も2割を超え、ここ数年、その割合は増加傾向にある。

昨年度、児童の一人がテレビ番組に「朝の放送では、日本語、ポルトガル語、タガログ語3か国語で『おはようございます』と言う挨拶がされる」という投稿が採用され、取材を受けた。朝の挨拶が3か国語でされていることだけでなく、国際教室の授業の内容を通訳が翻訳している光景が放送され、「国際的な学校」として取り上げられた。

2 可児市の特色ある取組～初期適応指導教室「ばら教室KAN I」～

2003、2004年度、外国人の子どもの教育環境に関する実態調査が行政、民間団体、研究者による協働研究が行われた。その翌年2005年に初期適応指導教室「ばら教室KAN I」が開設された。今年で開室20年を迎える

現在可児市では、日本の小・中学校に初めて就学する日本語指導が必要な児童生徒は、まず、4か月程度「ばら教室KAN I」に通うことが認められる。国籍はフィリピンとブラジルで9割以上をしめている。基礎的な日本語や算数・数学などの学習に加え、学校生活に適応できるよう学校のきまりやルールを学んでから、在籍する小・中学校に通う。箸の使い方など、日本の文化や習慣に関しても学んでいる。対象者は、可児市立の小・中学校に在籍する、日本の小中学校に初めて就学する日本語指導が必要な外国籍児童・生徒である。

年々通室する子どもの数が増えているため、現在は、「第1ばら教室」と「第2ばら教室」の2か所が開室されており、「第1ばら教室」での指導を終えた児童生徒が「第2ばら教室」に通い、指導を受けている。指導が終了すると修了式が行われ、今後、「ばら教室KAN I」に通う学校の子どもたちが終了式にWEBで参加することもあり、あたたかく迎える準備がされている。

3 可児市立今渡北小学校の児童の現状

今渡北小学校では、ブラジル国籍の転入児童の多くは、派遣会社の斡旋により来日する。

来日後は住む場所が確定できておらず、派遣会社がつまアパートに住む。そのためすぐに転居することも多くあり、家庭的に落ち着かない傾向がある。

ブラジル国籍に限らずフィリピン国籍の家庭に多く見られる傾向として、保護者が単独で来日し、幼少期は、母国の祖父母や親戚に預けられて育ったケースがある。物心ついてから初めて保護者と暮らす児童もいる。長く保護者と離れて生活していたために、保護者と生活環境の考え方もかけ離れており、新しい生活環境の構築には時間がかかることもあり、児童には精神的な負担がかかっている傾向がある。

また、日本生まれで、日本の幼稚園・保育所を経験し、小学校に入学してくる児童も多くいる。日常生活を送るための日本語はほとんど問題なく話すことができる。けれども保護者の中には日本語がほとんど話せないという家庭が少なからず存在する。こういったケースの場合、家庭では母語で保護者と会話ができる児童は少ない。保護者と児童は片言の日本語で意思疎通を図っており、家庭内で、学校の宿題、授業の復習等の取組が課題になっている。

ここ数年のフィリピンからの来日児童の問題が深刻化している。新型コロナウイルスの影響で、フィリピン国内では、感染予防のため、学校内のすべてオンラインで授業が行われた。特に低学年の学習の基礎を築くときにオンライン学習であった子どもたちは、きちんと授業を受けていない子どもが多くいたと推察される。そのため、学年に応じた基礎的な知識等の定着、学習習慣が形成されないまま来日した児童が少なくないという現状がある。

第2節 研究の目的と方法

1 研究の目的

今渡北小学校の特別支援学級は、2024年度は9クラスで、知的障害学級が6クラス、自閉症情緒障害学級が3クラスである。5年前2019年度は6クラス、ここ数年で急激に学級数が増えている。

増級の原因としては、保護者の特別支援学級への入級に対して抵抗感が少なくなったことも大きな理由としてあげられる。別の理由として、外国につながる児童の入級数の増加があげられる(図1)。2024年度現在の特別支援学級在籍57名中23名が外国につながる児童である。特別支援学級在籍児童の約4割を占めており、学習に困難さをかかえる外国につながる児童がとても多く、看過できない状況がある。

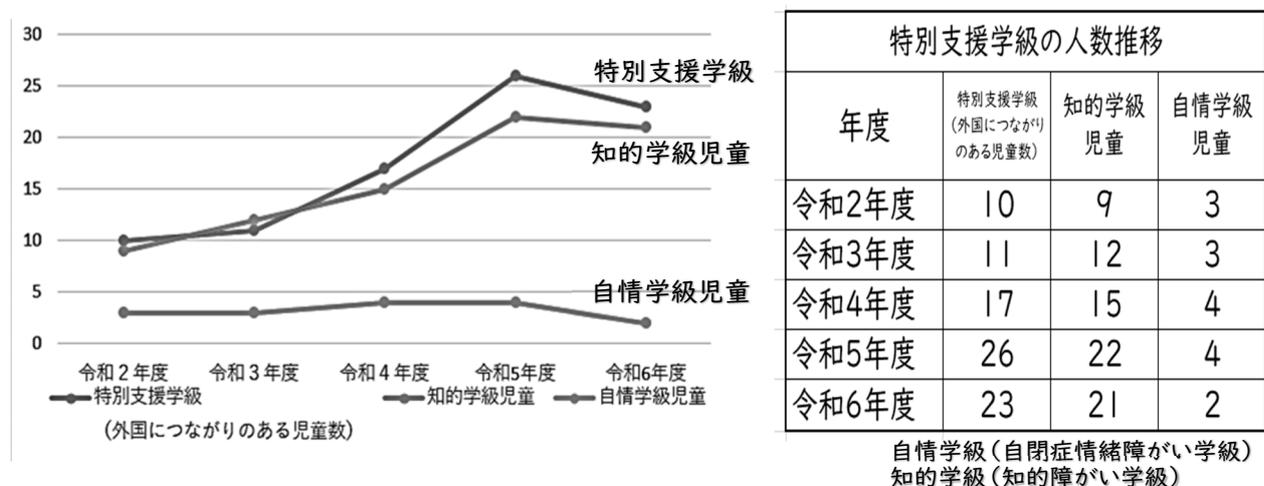


図1 特別支援学級の外国につながる児童の人数の推移

今渡北小学校の教職員42名にアンケートを実施したところ、以下のような悩みをかかえる教職員が多いことが明らかになった。

- ・通常の学級に2割から3割の外国につながる児童がいる。授業で困っている子がとても多く、学習の困難さから登校をしづる児童もいる。どのような支援をすればよいのか分からない。
- ・特別支援学級では、一人一人に合わせた学習を行うことができるが、日本語の理解が追いついていない。日本語指導が必要であるが、どのような指導をすればよいか分からない。
- ・学習に困難さを抱えている外国につながる児童の学びの場は、本当に特別支援学級でよいのだろうか。「言葉の問題と知的理解の低さの問題」、「発達障害なのか判断が付きにくい」、「環境への不適応」等、実態把握をすることが課題になっている。

外国につながる児童たちでつまずきが目立つ場合には、母国の学校文化や子育ての文化などの文化的背景が異なり、また、日本語のコミュニケーションも容易ではないことが多いことから、どのような支援が必要かを保護者と教員の間で共通理解することは困難を極める。さらに、教員の側が子どもにつまずきの姿を「発達障害」の疑いと安易に口に出すと、保護者からの強い反発を受けることになりかねない。こうした外国につながる児童のつまずきについて、どのように支援をすすめていくかが課題となっている。

このような現状の中、まず、「小学校就学」が大きな節目になると考える。そこで、幼稚園・保育所から小学校1年生に移行する時期が「接続期」となり（以下、「接続期」とする）、子どもたちが新たな社会システムに入る変化の時期であり、成長の節目となる。そこで、小学校就学前に何ができるか、小学校就学後には何ができるかを考えることが重要である。

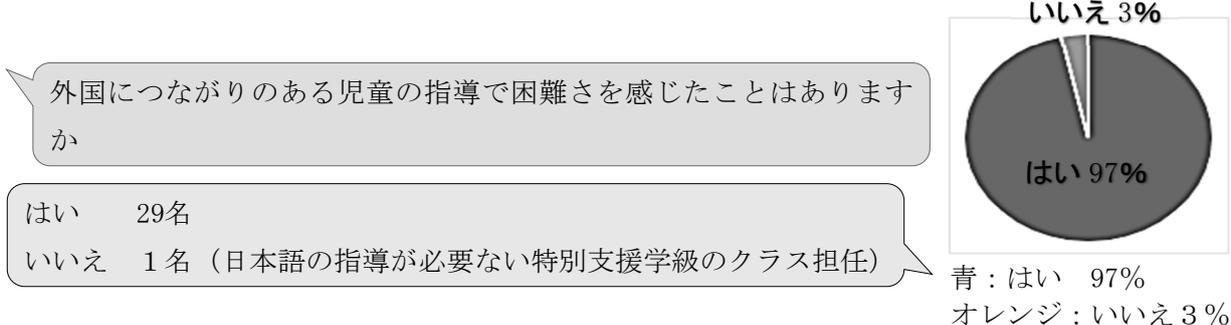
また、外国につながる児童のある特別なニーズのある子どもにかかわる特別支援教育コーディネーター、国際教室担当者、特別支援学級担任がそれぞれの立場でどのような支援ができるかを整理し、実践を通して、支援を繋ぐ校内体制の在り方について明らかにすることを本研究の目的とする。

2 研究の方法

まず、第1段階として、職員にアンケート調査を行い、外国につながる児童の現状及び校内支援体制等について整理・考察した。以下がアンケート結果である。

校内の教職員42名に2023年3月にGoogleフォームを活用してアンケートを実施した。42名中30名（回答率65%）より回答があり、以下のような結果であった。

なお、左側からの吹き出しが設問で、右側からの吹き出しが回答結果である。



授業や生活の中で工夫していることはありますか

- ・口頭での説明だけでなく、黒板にもやるべきことを書くようにしている。
- ・やるべきことを実際に見せながら説明する。
- ・読めない漢字があったときには、ふりがなつきのメモを渡すようにしている。

課題はどんなことがありますか

- ・簡単な生活ルールが理解できない、守れない。それがトラブルのたねになっている。
- ・教科書が読めなかったり、教師の話していることが理解できなかったりする。理解できなくて手遊びをしたり、おしゃべりしたりする。
- ・文化や生活習慣の違いの困難さもあり、学級担任一人で補っていくのは難しい。

外国につながるのがある児童がいることの良さはどんなところですか

- ・英語の授業が盛り上がる。英語で外国籍の児童が活躍できる。
- ・困っている人がいたらどうしたらよいか、困ったときにどうしたらよいかを学べる。いろいろな子がいることを体感できる。

以上の結果から、外国につながるのがある児童に指導を行った教職員のほぼ全員が困難さを感じ、工夫を行いながら、できるだけ理解がしやすいように配慮していることが明らかとなった。また、学校生活の中で、外国につながるのがある児童が在籍する良さを生かしたり、意図的に活躍する場を位置付けたりしていることが分かった。

この結果を受けて、研究は、以下の2点について、外国につながる児童に関わる国際教室担当者、特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任がそれぞれの立場から図2の支援の場において行う。

- ① 就学前後の外国につながるのがある児童に適切な支援・指導を受けることができるようにするために、校内支援体制の整備、実態把握、校内校外の連携について整理検討する（国際教室担当者と特別支援教育コーディネーター）。
- ② 小学校1年生時から特別支援学級に在籍する児童にアセスメントを実施し、具体的な指導・支援内容について事例研究を行う（特別支援学級担任）。

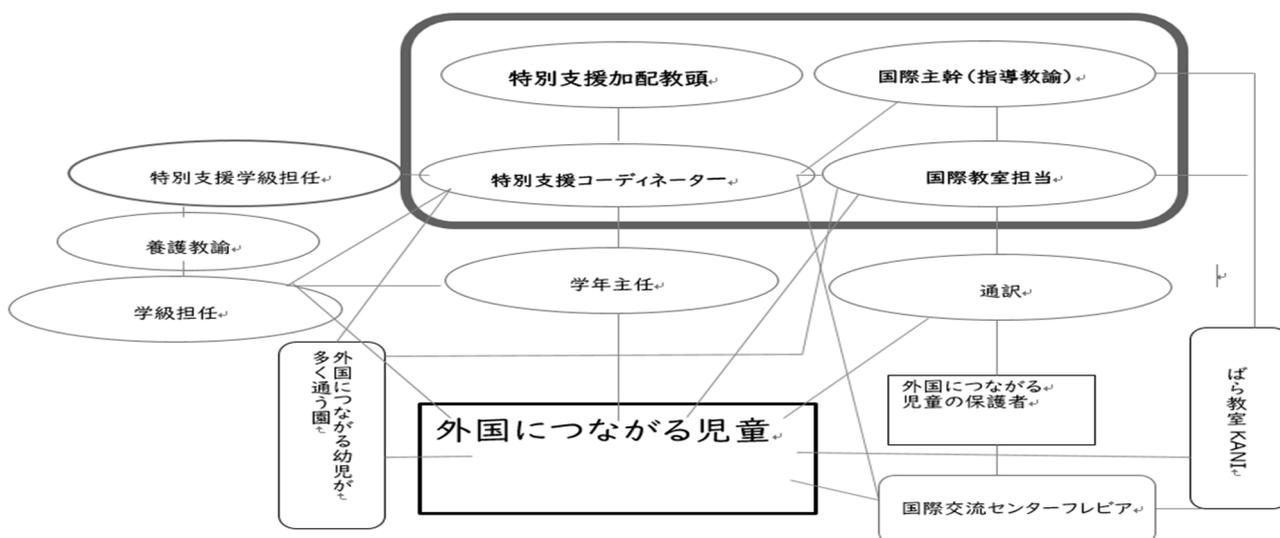


図2 校内の支援の場

第2章 校内支援体制の整備

第1節 校内教育体制の見直し

1 校内教育支援委員会の見直し

(1) 校内支援教育委員会の位置づけと役割の変化

以前、校内教育支援委員会は年2回実施し、児童の支援の方向性を検討したり、気になる児童を職員で周知したりするために実施していた。さらに臨時で規模を小さくしたものを数回行っていった。このときの校内教育支援委員会の主な目的は特別支援学級への入級や通級指導教室（発達・言語）の利用のための判定を行っていた。担任が気になる児童を挙げ、児童の様子を話し、参加者はその話を聞いており、発言をする機会はありませんでした。そこで校内教育支援委員会の機能を見直す必要があると考えた。児童の実態を正確に把握し、適切な支援を検討すること、全教職員の専門性の向上を図る場所にすることを目指して、少しずつ校内教育支援委員会の在り方を変えていった。

2020年度に発達通級指導教室（以後、「発達通級」と記す）が設置されることとなった。蘇南中学校との巡回指導になり、週2日で発達通級の指導が開始された。2021年度に発達通級利用児童の判定の場が変更され、可見市教育支援委員会での判定から、学校の校内教育支援委員会での判定に代わった。また、この年、発達通級は自校通級になり、2教室設置されることとなった。自校に発達通級が設置され、利用については校内教育支援委員会の場で検討することとなり、さらに校内教育支援委員会の在り方について改善が必要となっていった。

外国につながる児童の発達通級利用は増加傾向にある。この要因として、自校に設置されたことと、国際教室と特別支援学級の連携ができてきたこと、児童の実態把握で発達通級の利用が妥当とされる児童が明らかになってきたことが考えられる。

(資料1 校内支援委員会の位置づけと役割の変化)

(2) 校内教育支援委員会の課題と見直し

<課題>

2017年度の校内教育支援委員会は多くの児童が上がってくるが、人数が多く、3時間ほどの時間がかかり会議を行っていた。構成員は、情報共有の時間で長時間話を聞いているだけの受動的な参加であり、校内教育支援委員会の重要性を感じているものの負担感を感じていた。学級の児童を挙げた担任は、構成員に児童の現状について知ってもらうことはできるものの、保護者の同意が得られていない場合、その後の支援・指導については方向性が見えにくかった。担任は支援が必要と感じている児童を1人で抱え込んでしまう傾向にあった。

2021年頃には、発達通級を利用する児童について校内教育支援委員会で判定を行うこととなった。発達通級利用希望の児童は、本人の困難さはそれぞれ異なっており、実態が見えにくく、教育的ニーズを把握することが難しかった。そこで、校内の教職員に児童の実態を把握するためにアセスメントする力が今まで以上に必要になった。

<見直し>

- ・担任が1人で抱え込まず、学校全体で児童を把握し支援・指導を行う。
- ・連携できる人や場所を検討して繋がる。
- ・構成員の経験を活かし、支援・指導を検討する場にする。
- ・校内の職員の特別支援教育の知識を広め、アセスメントする力の向上を図る。
- ・校内の全職員は支援・指導を行う。

(3) 見直しで行ったこと

①運営委員会、職員会で校内教育支援委員会を見直しについて提案

- ・全職員にどのような会にしたいかを伝える。
校内での支援の方向性を検討できるような建設的な意見の発言をお願いする。
- ・限られた時間を有効に使うために、担任が話す時間を決め、検討する時間を確保する。

【担任にお願いしたこと】

- ・児童の実態を端的に話す。
- ・実態が分かりやすい資料を提示する。
- ・学年会で相談し、校内教育支援委員会に出すかどうか検討する。

【学年主任にお願いすること】

- ・挙げる児童を学年会で話し合い、決定する。
- ・校内教育支援委員会までに挙がっている児童を見に行き、実態を掴む。
- ・校内教育支援委員会で児童の実態と学年で検討した方向性を話す。

【構成員の先生方をお願いすること】

児童の実態把握

- ・児童のことで知っている情報を出す。
- ・国際教室指導教諭には、これまでの経緯や国際教室での様子を話す。
- ・発達通級担当、特別支援学級担任は体験授業の様子や見立てを話す。

支援の検討

- ・今までの経験から支援の方法を提案する。
- ・担任が「やってみたい」「できるかも」と思う支援を提案する。

②発達通級の校内判定

可児市教育支援委員会に習って、校内判定の仕方を決めていった。

- ・校内観察を実施する。校長、教頭、特別支援教育コーディネーター、発達通級担当で事前に児童の様子を観察に行く。
- ・観察するための参考資料を準備する。(判定資料、可児市が出している教育支援の資料)
- ・校内観察を行った先生は、その様子を校内教育支援委員会で発言する。

③関係する先生でケース会の実施

- ・担任や体験授業をした特別支援学級担任や発達通級担当、国際主任などで児童の実態や方向性を検討する。

2 職員の専門性の向上

(1) 目的

職員の専門性の向上を学校全体で進めている。児童の理解や支援が入学時、担任が変わった際に途切れないようにすること、特別なニーズのある児童の理解を進めることを目的として行っている。全職員の取り組みと特別支援学級担任や発達通級担当（以下、支援部を示す）の取り組みがある。

(2) 全職員にむけて

職員全体では、職員会や運営委員会での情報共有、学年会で支援に関わる児童について検討することで、職員全員は特別支援教育に関わり、検討する機会を位置付けている。

資料2-① 専門性の向上の取組 職員全員で特別支援教育に関わるために取組

(3) 支援部の専門性の向上

より専門的な支援部の取り組みでは、特別支援学校や岐阜県総合教育センターや自主的に参加した研修の資料を回したり、学年会等で伝えたりして情報共有を行っている。支援部の中でも経験に差があることや研修に行きたくても家庭の事情で行けないこともある。そのため、支援部全体で情報を共有することで、専門性の向上に繋がっている。

資料2-② 専門性の向上の取組 特別支援学級担任・発達通級指導教室担当の専門性の向上の取組

3 国際教室担当者と特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任との連携

(1) 連携の必要性

特別支援学級に在籍している外国につながる児童は国際教室を利用していた児童が多いため、児童の情報を共有することが多い。国際教室で使用している教材が特別支援教育でも使うことができる。実際にこれまで教材を共有してきた。最近では、連携の重要性を感じ、意図的に連携を行っている。

（２）教材教具の共有

特別支援教育、国際教室のそれぞれに購入した教材がある。お互いに共有して必要なときにいつでも使うことができるようになっている。国際教室で使っている国語の学習プリントは、特別支援学級の児童も使いやすく作られている。必要な情報を絞り、学習課題である大切な部分を学ぶことになっている。特別支援学級の先生は、個々の実態に応じて教材を準備するため、その教材をさらに児童に合わせて手を加えて作成することもある。

（３）教室配置

国際教室の隣に特別支援学級を配置している。特別支援学級の中でも特に外国につながるのある児童の多い学級や母語での支援が必要な児童がいる学級である。国際教室には通訳職員が入っているため、言語が分からずに困ったときに助けを求めることができるようにしている。現在は国際教室の横に特別支援学級の知的障害学級低学年の教室が配置されている。配置したことで以下のような良い点があった。

【良い点】

- ・通訳職員が教室の前を通り、声掛けを行う。母語が近くにある環境であるため、安心感がある。
- ・トラブルになったときに、母語で話を聞くことができ、児童の気持ちに寄り添うことができる。また、指導が必要なときに、指導が分かりやすい。
- ・国際教室での学習を特別支援学級に取り入れることができる。国際教室でひらがなの動画を使っていたら、特別支援学級の児童も覚えて口ずさんでいた。
- ・特別支援学級は連絡帳で保護者とやりとりをすることが多い。書く際には翻訳アプリを使うことができるが、読む際には翻訳アプリでは分かりにくい。国際教室の通訳職員や国際教室担当者の英語が堪能な先生に聞くことができる。

（４）特別なニーズのある児童に関わる話し合い

国際教室を利用していた児童が特別支援教育コーディネーターに相談に上がってくることがある。国際教室担当者・学級担任や保護者から学習の習得や行動の問題で相談があることがある。国際教室の指導教諭や国際主任と児童について話をする。国際教室で少人数学習を行い、通訳職員が母語で授業の内容を伝えてくれる環境でも、困難さを示す児童がいる。外国につながるのある児童は国際と特別支援教育の視点から見ることにより児童の実態を把握することができる。

ケース会は国際の指導教諭や主任、特別支援学級の体験授業を実施した特別支援学級担任が入ることがある。外国につながるのある児童の困難さの背景や学習の状況を把握するために、国際教室の先生がもっている情報や知識が必要である。関係する先生で知っている情報を出し合うことで、児童を多角的に捉えていくことができる。児童を取り巻く支援検討チーム（図２）をその時々に合わせて組んでいる。

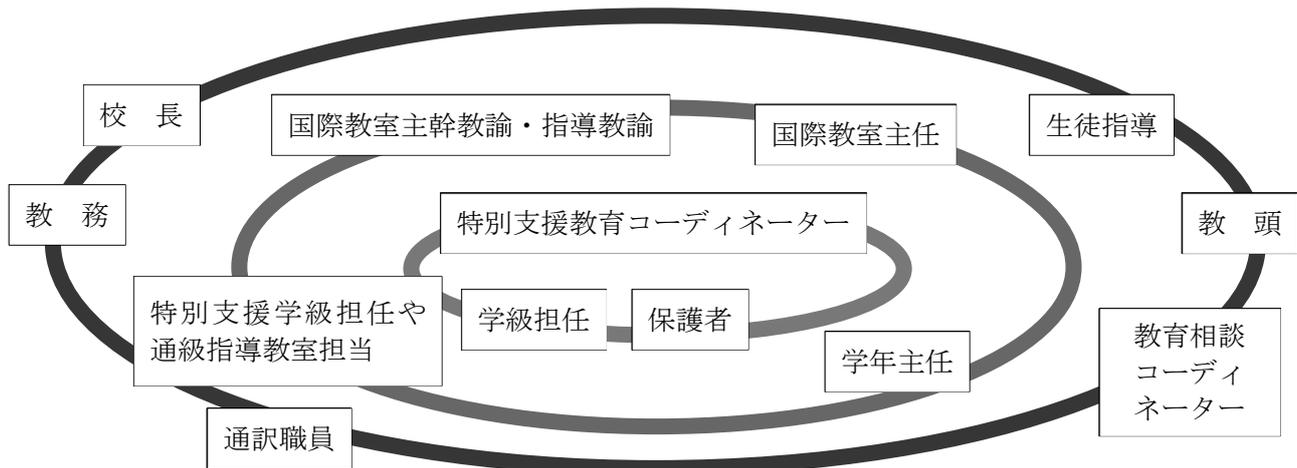


図2 児童を取り巻く支援検討チーム

内側の円

第1に特別支援教育コーディネーター、学級担任、保護者で主訴を確認し、今後の支援を検討する。

2つ目の円

第2に国際主幹・指導教諭や国際主任、学年主任、体験授業を行っていた特別支援学級担任や発達通級担当と情報共有を行い、支援・指導について検討する。

外側の円

第3に早急に学校運営に関わるような場合は校長や教頭、教務、生徒指導、教育相談等が入り、情報共有を行い、学校全体としての支援・指導を検討する。

その後、全職員に職員会等で情報共有を行い、共通理解を図る。保護者との懇談に入る通訳職員にも情報を伝え、協力を図る。本校では通訳職員の特別支援教育についての理解が高く、保護者に親身になって、相談を受けている。教師からの言葉ではなく、通訳職員の言葉は保護者にとっても大きい。通訳職員に対して「どう思う？」というような保護者からの投げかけも多い。

(5) 特別支援国際部会

2024年度はこれまでなかった国際教室担当教員と特別支援学級担任教員、発達通級指導教室担当教員で研究会を立ち上げた。

①メンバー

国際部：日本語初期指導担当教員、低学年担当教員、中学年担当教員、高学年担当教員、国際指導教諭

支援部：特別支援学級担任教員（知的障害学級担任、自閉症・情緒障害学級担任）、発達通級指導教室担当教員

②目的

- ・国際部と支援部で連携し、外国につながるのある児童、特別支援教育に関わる児童の言語習得の指導方法を検討し、実践する。
- ・外国につながるのある児童への指導の困難さを出し合い、解決策を検討し、連携を図る。

③第1回特別支援国際部会

(ア) 言語習得の指導方法の紹介

- ・国際教室担当教員の実践（日本語1）

2年生 国語科 単元「ともだちをさがそう」

迷子のお知らせを通して、大事なことを落とさずに集中して聞く力を育てる学習である。この教材を利用し、低学年国際教室では服装、色、着るなどの動詞などの日本語での言い方を学んだ。児童が生活の中で身に付けているものを思い出すことができるように、教科書の挿絵だけではなく、教材を作りイメージがもちやすいように工夫した。

児童はスカートやズボンは「履く」、帽子は「かぶる」と表現することを学ぶことができた。色は服装の色を確認した後、教師から「〇〇さんのシャツは〇色だね。」と声を掛けたことで、身近なものの色に注目する機会となった。

- ・特別支援学級 自閉症・情緒障害学級担任の実践

自立活動 「先生の名前を覚えよう」

この自閉症・情緒障害学級は1年生4人、3年生3人のクラスである。新学期になり、新しい先生と出会いがあった4月に「先生の名前を覚えよう」という活動を行った。先生の写真と名前のカードを用意して、マッチングさせる活動、インタビューをする活動で名前を覚える。

先生の名前を覚えることで、先生に対して親しみを覚え、話をする事への不安が軽減した。名前を呼ばれた先生も笑顔で応え、良い関わりができていった。



写真1 特別支援国際部会（1）



写真2 特別支援国際部会（2）

(イ) 外国につながるのある児童の課題と指導についての検討

国際部と支援部の教員が混ざり、2グループに分かれて課題と改善策について検討を行った。実施方法は、KJ法で付箋に考えを書いて、グルーピングを行った。

Aグループ 写真3

<指導で困っていること>

- ・家庭の協力
 - ・持ち物が揃わない。
 - ・保護者の理解、連携の困難さ。
 - ・学習の理解
- 単語は理解できても要旨を理解することが課題。

家庭環境により語彙が育ちにくい。

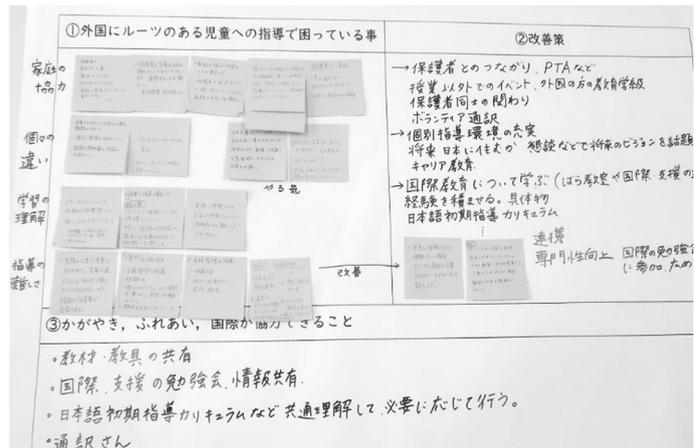


写真3 KJ法 Aグループ

<改善策>

- ・保護者同士のつながりを作る。授業以外でのイベント、家庭教育学級を行う。
- ・国際教室の学習内容について職員が学ぶ。

<支援部、国際部で協力できること>

- ・教材教具の共有。
- ・国際と支援の勉強会、情報共有。

Bグループ 写真4

<指導で困っていること>

- ・本人との意思疎通
- ・学習の困難さ
- ・見極めの難しさ

<改善策>

- ・母語環境を大切にする。相談できる場所を紹介する。
- ・学習では日本語に触れる機会を作る。物と文字のマッチング、生活語彙、文章へ段階的に指導する。

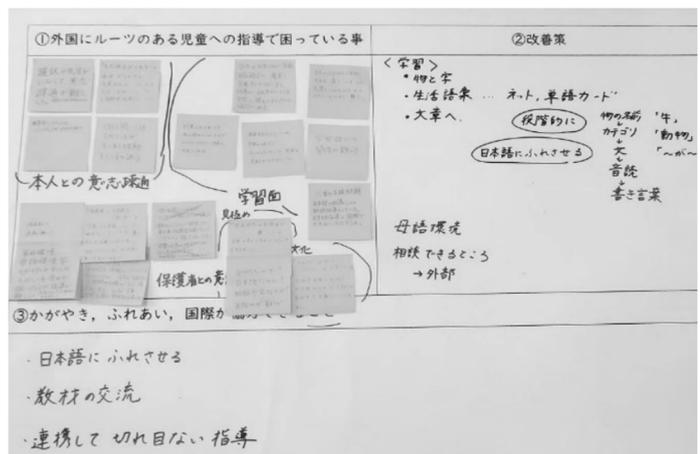


写真4 KJ法 Bグループ

<支援部、国際部で協力できること>

- ・日本語に触れさせる。
- ・連携して、切れ目のない指導を行う。

第2節 外国につながる児童の実態把握

1 アセスメントによる実態把握

(1) 聞き取り

外国につながる児童の相談があった際に確認する事項がある。特別なニーズや言語習得に関する困難さが顕著なこともあるため、事前に聞き取りする内容を用意している。数年前は1年生の児童の様子を見て、その後、特別支援教育の必要性を検討することがほとんどであった。

しかし、1人1人の実態を見ていくと、1年生という同学年であっても日本語による環境は大いに異なっていることが分かってきた。両親とも日本生まれで、本人も日本で生まれて日本の幼稚園に通っているような日本語に多く触れている子どもから、小学校入学の数か月前に来日して保護者は母語を話しているため、ほとんど日本語に触れていない子どもまで、子どもの背景は様々である。また、大人しく見過ごされていたため、6年生になって保護者から相談があり、中学校進学の際に特別支援学級に入級することになった子どもがいる。長年、困っていたが支援を受けることができていなかった子どももいた。そのため、「1年生の時は様子を見よう」という考えから、支援が必要な子どもにはできるだけ早く支援を受けることができるようにするように学校全体の取組が変わってきた。子どもの実態を把握することができるように、確認事項を担任や保護者に聞き取り、その上で実態把握のためのアセスメントを実施するようになった。

【確認事項】

- ・ 来日からの年月・家庭内言語（保護者の母語）・将来的に日本で定住を踏まえた生活等の見直し
- ・ 国際教室の利用・相談内容に関する実態
- ・ 就学時健診の結果

相談後に、特別支援教育コーディネーター・通常の学級担任・教頭・国際教室指導教諭・国際教室主任・通常の学級学年主任などその時に関わっている教職員で集まり、方向性を検討するために話し合いをしたり、関係する教職員が多い場合はケース会を行ったりする。相談を受けてから図3の流れで、連携してそれぞれの立場で支援・指導を行う。

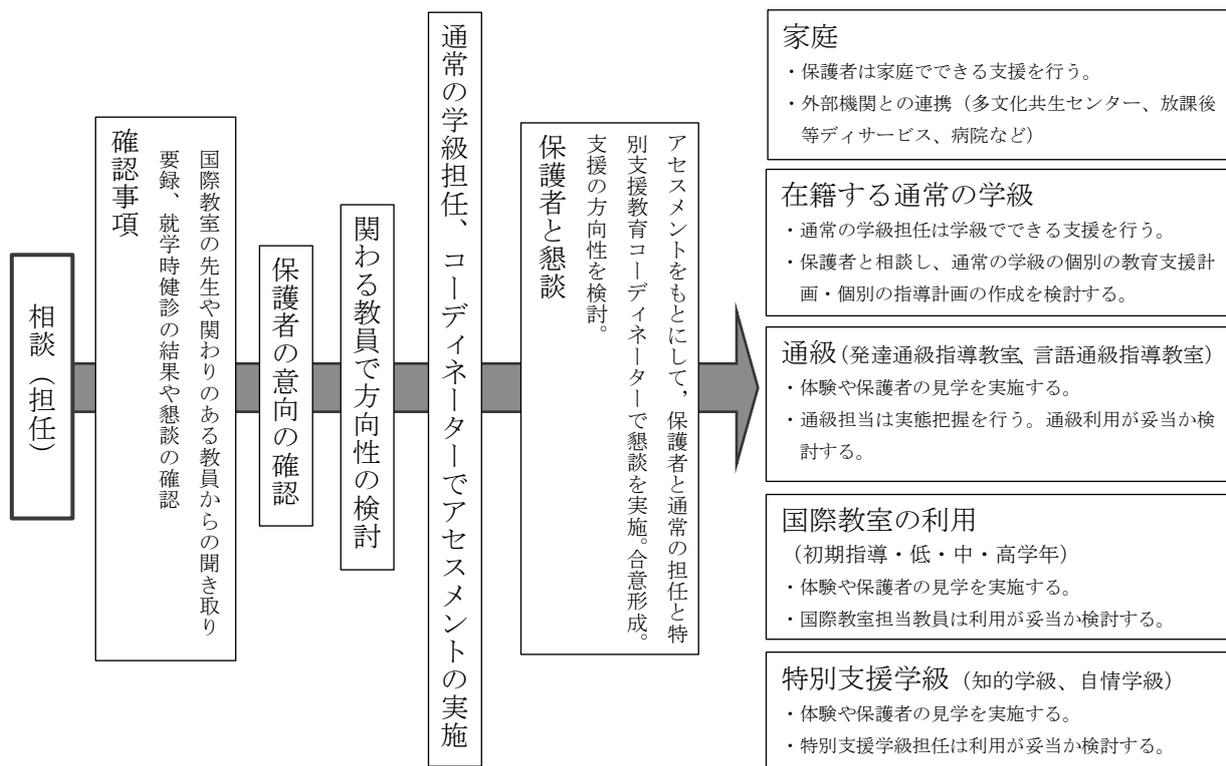


図3 相談からの流れ

(2) 検査の検討

外国につながるのある児童に行うアセスメントは長年に渡り、検討してきた。どのようにしたら、児童の実態を的確に把握し、必要な支援を行うことができるのか特別支援教育コーディネーターや特別支援学級の担任、そして教頭と何度も話し合いを行ってきた。研修会に参加したり、専門書を読んだりなど、情報を収集し、試行錯誤してきた。その中でたどり着いてきたものがあるが今後、継続して検討していく必要がある。現在、以下のように検査を実施している。

【アセスメントに関する課題】

- ・日本版知能検査は外国につながるのある児童の能力を適切に測ることができるのか。
- ・言語習得と発達の問題は見極められるのか。
- ・言語習得は来日してどのくらいかかるのか。
- ・生活力はあるが、学習では困難さが強く授業についていくことができない児童はどうしたらよいか。
- ・生活力のアセスメントはどのようにしたら、良いのか。
- ・外国につながるのある児童の学習障害（LD）は見極めることができるのか。

このように、検査は妥当かという課題、言語の課題、生活力の課題などがあった。研修や書籍などからいくつかのアセスメントにたどり着き、実際に使用してみた。

(3) それぞれの検査の特徴と実施状況

外国につながるのある児童に実態を掴むためにこれまでにいくつかの検査を行い、適切に児童の実態を掴むことができるか検討を行ってきた。行ってきた検査の特徴と実施して感じたことをまとめた。

資料3 検査の特徴と実施状況

(4) 検査のまとめ

実施していく中で、検査の特徴や活用方法が明らかになってきた。検査の特徴を掴み、使い分けていくことで、必要な情報を得ることができた。保護者の相談の主訴によってどの検査でバッテリーを組むか決めるとより児童の実態を掴むことができる。

表2 主訴に応じて実施した検査

児童	主訴	実施する検査
A	児童に困難さがあり、どうかして支援を受けたい	・WISC-VやKABC-IIを実施し、認知能力と得意な領域や不得意な領域を明らかにした。児童の強い力を活かした支援方法を提案する。 ・長時間の検査が難しい場合は、WISC-Vとグッドイナフ人物画検査を実施した。
B	日本語がなかなか習得できない	・WISC-Vで認知能力を把握し、PVT-Rで語彙の力、J. COSS日本語理解テストで日本語文法の力を把握した。

児童	主訴	実施する検査
C	言語による学習困難かLDによる読み書きの困難さかわからない	・WISC-Vで認知能力を把握した。PVT-Rで語彙の力、STRAW-R改訂版 標準読み書きスクリーニング検査で読み書きの習得度を把握した。
D	日本語習得の習得段階を知りたい	・外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLAを定期的実施する。
E	特別支援学級、発達通級指導教室で指導内容を検討したい	・PVT-Rで語彙の力、J.COSS日本語理解テストで日本語文法、STRAW-R改訂版 標準読み書きスクリーニング検査で具体的に指導するべきところを把握する。

上記のように主訴によってどの検査でバッテリーを組むかを決めて実施すると次の支援に繋がっていった。特別支援教育コーディネーターに対して、「支援を受けるべきか」「どんなところに困っているか知りたい」という相談の主訴がもっとも多い。そのため、WISC-VとKABC-IIの両方を実施して、非言語性能力を把握することが多い。この2つの検査でバッテリーを組み外国につながる児童の実態把握を行ってきた。

しかし、外国につながる児童は、検査結果だけではなく、成育歴、通常の学級での授業の様子や特別支援学級での体験授業の様子を観察することや、保護者の言語、家庭内言語、乳幼児期からの言語習得、思考言語なども把握しておく必要があると感じている。

(5) 就学後の早い段階での実態把握

就学後の実態把握では、児童の授業や生活の様子の観察や関わる教員の見立てが重要になる。就学前の引継ぎや就学時健診の情報も参考にして、関わる教員で見立てを行う。検査を実施する際には、WISC-Vとグッドイナフ人物画検査を実施した。

観察や就学前の情報、検査結果をもとにして懇談を行い、保護者の考えを聞く、保護者と共通理解しながら、特別支援学級での体験や国際教室の利用、支援について検討する。

特別支援学級や発達通級指導教室を希望する場合には体験を数回行う。体験を実施した教員の意見を聞き、利用をした方が良いか再検討し、保護者や本人の意向を確認する。いくつかの段階を踏みながら、支援の方向性を検討している。以下の支援の検討プロセスを示す。

①検討する

- ・児童の授業や生活の様子の観察
- ・就学前の引継ぎや就学時健診の情報、検査結果

②支援の方向を試す

- ・特別支援学級、発達通級指導教室の体験
- ・保護者の特別支援学級、発達通級指導教室の見学

③方向性の決定

- ・体験の際の様子や教員の意見の確認
- ・関わる教員で支援の方向性の検討

④保護者の同意

- ・本人、保護者の意向を確認し、支援の提案や合意形成を行う

2 外部機関との連携による実態把握

(1) 目的

外部の関係機関との連携を行うことで、より児童の実態を掴み、適切な支援に繋げることを目的としている。文部科学省と厚生労働省の家庭と教育と福祉の連携「トライアングル」プロジェクトの話聞き、一層連携の重要性を感じ、特別支援教育には連携が不可欠と考え、積極的に取り組んできた。児童が関わる機関と連携することで、同じ方向を向いて支援を行っていくこと、専門性の向上（児童の実態把握、支援・指導のスキルアップ等）、児童の実態を多角的に捉えることができるようにすることをねらいとしている。今渡北小学校は外国につながりのある児童が多いため、国際教育に関わる連携も行い、特別支援教育と国際教育の両方の視点をもつことができるように取り組んでいる。

(2) 外部連携の実際

教育関係では、中学校の特別支援学級主任・特別支援教育コーディネーター、特別支援学校担当教員、可児市教育支援委員会担当指導主事、市内の通級指導教室担当者、特に特別支援主幹教諭はすぐに連絡を取り、相談した。また、繋がりを作って、相談できる連携先として、地域の高等学校通級指導教室担当や高等学校国際クラス教員がある。

医療関係では、保護者の同意を得て、病院に同行して医師と直接話をすることや教育委員会の行う療士士訪問を利用し、作業療法士や言語聴覚士から助言を受けることがある。

福祉関係では、放課後デイサービスとケース会や日常的に情報交流を行っている。放課後デイサービスの行事を見学に行き、児童の学校外での様子を見に行くことがある。

国際関係では市の多文化共生センターへ見学に行き、多文化共生について学んだり、研修会に参加したりして繋がりを作っていた。多文化共生センターの学習支援を利用している児童がいるため、ケース会を実施して、情報交流を行うこともあった。岐阜県や三重県の多文化共生センターの研修会に参加し、多文化共生について学んだ。

資料4 連携先と連携内容

(3) 外部連携の課題

<課題>

- ・外部からの助言を活かすための方法や教員の技量が必要である。助言を受けても、活かすことは難しいことが多く、助言をもとに学校現場でできることを検討することが求められる。担当者が一人で助言を受け、一人で支援に繋げることは難しく、複数で助言を聞き、児童にあった支援になるように定期的に見直しを行い、実践していく必要がある。
- ・校内の理解があり、外部連携を行うことができた。校外で研修会等に参加する際には、年次休暇を取っていくこともあった。特別支援教育の専門性の向上のためには外部で学ぶこともある。体制の整備と校内理解を働きかける必要がある。
- ・時間の確保の必要性があり、学校業務で勤務時間が超過している中、時間の確保が難しい状況があった。
- ・多くの教員が関わり、チームで取り組むことが必要である。1人で支援を行っていると、担当者が変わると連携が途絶えることが危惧される。

第3節 連携協議会の定期開催

1 オンラインミーティングの概要と協議内容

2023年度より2ヶ月に1度程度、定期協議会を開催した。参加者は研究協力者、教頭、特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任、国際教室主任、国際教室主幹である。オンラインミーティングの内容(表3)は、本校の抱える課題、取り組みの検討、神奈川や三重、愛知の取り組みを学んだ。研究協力者が来校し、実際に検討することや取り組みを行っている学校や多文化共生センター等の実際の現場を見て学んだ。

表3 オンラインミーティングの協議日程と内容

開催年月	手段	概要	外部講師	
令和5年	4月	ZOOM	新学期が始まって、4月の現状と課題 校内アンケートのまとめ	
	7月	ZOOM	外国につながるのある子どものための教材	
	8月	ZOOM	日本語教室の入級 就学前のアセスメント	横浜市日本語 指導主事
	11月	来校	学校の現状と課題 豊田市の取り組み、言語習得について	豊田市の発達に 関わる言語聴覚士
令和6年	1月	ZOOM	みずほ財団の論文	
	2月	ZOOM	国立特別支援教育総合研究所 公開研究協議会	
	3月	来校	研究の取組の進捗状況 LD学会のポスター発表について	
	4月	ZOOM	学校の現状と課題 外国につながるのある児童の散在地区の現状	
	8月	来校	研究の取り組みのまとめ方 外国につながるのある子どもの保育所、放課後デイ サービスなど地域との連携	

2 協議を経て広がったこと

- ・外国につながりがある特別なニーズのある児童について、相談する先が見つからず、迷いながら指導に当たっていた。そのため、研究協力者という外部からの意見を頂くことで、自校の取り組みを見直し、良さや課題を見つけることに繋がった。
- ・愛知、三重、神奈川の取り組みについて知り、愛知の方に協議会に参加してもらい話を聞いたり、三重の多文化共生センターの研修会を受けたりと外部とのつながりを作っていた。神奈川の横須賀市の日本語ステーションを見学し、日本語の理解が十分でない児童生徒やその保護者へのサポートを行っている横須賀市の取り組みを学ぶことができた。特別なニーズのある外国につながるのある児童も、多文化共生センターや国際教室と繋がっていることが分かった。その後多文化共生センターの研修会に参加したり、可児市の多文化共生センターの方と連携を図ったりすることができた。
- ・本校の実践をまとめていくことにも挑戦していくきっかけとなった。まとめていくことで、取り組みについて振り返り、課題を見つけ、実践していくことができた。

第3章 国際教室の実践

第1節 国際教室に通う児童への就学前の取組の実践

1 はじめに

- ・外国籍児童219名のうち日本語指導が必要な児童数は122名（全体の56%）そのうち、特別な教育課程を受けている児童94名（必要数の77%）に留まっている。
- ・日本生まれの外国籍児童、特別のニーズが必要と疑われる外国籍児童等の増加により、日本語能力の定着に時間がかかる（入学時から1年以上国際教室に通室する）。
- ・外国籍児童生徒数18名に1名の指導者が確保できず、日本語指導の効率が上がらない。
- ・就学前に日本語に親しむ環境がないまま、入学してくる（認可外の日本語を話さない幼稚園への通園や幼・保育所への就園がない）。

このような状況があるため、早期より「聞く」指導に重点を置いた特別な教育課程を編成することで、確かな日本語能力を身に付けることができると考え、実践した。

2 実践の内容

- ・就学時健診を利用して日本語能力を把握し、国際家庭に日本語での教育の場の情報を伝えたことが、国際家庭の日本の学校教育への適正に有効かを検討する。
- ・市内外国籍児童生徒コーディネーターとの連携の仕方を整理し、情報交換していくことは、円滑な学校学級編成に不可欠か検討する。
- ・入学前・入学後（2ヶ月以内）の日本語能力を測定し、特別な教育課程の編成・再編成をすることは、外国籍児童の日本語の習得の速さの有効性を検討する。
- ・入学後、校内において通常の学級担任との連携の仕方を工夫することで、外国につながるのある児童の帰属意識の向上に役立ち、日本語習得の速さに有効か検討する。

（1）就学時健診時における日本語力調査

①日本語指導（特別な教育課程：取り出し指導）の基準の明確化

- ア やさしい日本語での質問に対して日本語で受け答えができ、教員の指示に従って動くことができる。さらに語彙も理解でき90%以上の得点があれば通常の学級での学習が可能とみなす。
- イ 日本語を習得させるために、まずは日本語を聞かせる経験をもたせる必要がある。通訳の支援をうけながら母語とつなげて日本語を聞くことから始める。
- ウ 恒常的に日本語を聞く時間をもたせるためにも入学してすぐに国際教室を開設する意味があると考える。

②就学時健診時の日本語力調査作成にあたって

【2023年度 1年生対象の判定テスト】

5月に1年生対象とした判定テストを実施した。

(ア) 判定テストを実施した理由

日本語指導が必要でない児童も通級を希望してきたため、4月1年生の国際教室は30人でスタートすることになった。日本語力の差が大きく指導に難しさを感じた。そのため5月の連休明けに日本語指導が必要か調査することにした。

(イ) 課題点

- ・5月に個別にテストの時間を確保することが難しかった。
- ・10月の就学時健診の際、日本語力の調査をしておくことで、入学時から支援が必要な児童をある程度把握し、効果的な支援ができるのではないかと考えた。
- ・語彙が多く、時間がかかりすぎる。

資料5 2024年度 1年生対象の判定テスト

【2024年度 新1年生対象 就学時健診 日本語力調査】

2023年度の5月に1年生対象に行った判定テストの問題点を改善し、試作を作成した。試作を校内で検討し、さらに問題点を改善した。完成版を作り上げ、10月の就学時健診にて実施した。

△課題点

- ・語彙を全て発話させていると時間がかかる。
- ・語彙を発話することはできなくても語彙を聞いて指し示すことはできる児童もいる。
- ・一度に多くの絵カードを提示されると集中できない。
- ・絵が小さい。
- ・テスト後、ごほうびシールを選んで貼ることで達成感を味わって終わらせた方がよい。

資料6 2024年度 新1年生対象 就学時健診 日本語力調査 試作版

資料7 2024年度 新1年生対象 就学時健診 日本語力調査 完成版

資料8 日本語力調査 実施報告

資料9 日本語力調査 記録用紙

(2) 就学前から外部関係機関との連携

来日して間もない児童や幼稚園等に通っていない児童については、就学前から可児市教育委員会の外国籍児童生徒のコーディネート担当者（以下外国籍児童コーディネーターとする）や可児市子育て支援課との連携を図っていく。

表4 就学前の連携体制

時期	取り組み	対象者	内容
5月から	おひさま教室	認可外保育園対象	平日週2回 日本語指導
10月	就学時健診 日本語力調査	入学予定者	外国につながるのある児童を対象に日本語力調査を実施
10月中旬	入学ガイダンス	おひさま教室 認可外保育園対象	日本の学校教育について説明する。 日本語力調査結果から日本語の力に弱さのある子どもについて外国籍児童生徒コーディネーターからひよこ教室への通室を促す。 幼稚園、保育園にも必要に応じて日本語力をつける取り組みを実施してもらうように連携を図る。
10月から	ひよこ教室	未就園児 認可外保育園児対象	毎週日曜日 日本語指導
12月	家庭訪問及び観察	就学時健診欠席者 新規入国児童	教頭・指導教諭が園や家庭を訪問し児童の様子を観察し情報を共有する。
2月	プレスクールの開催	入学予定者	国際教室の席に座って話を聞くなどの活動を行う。児童の様子を観察し、入学後の指導につなげる。 クラス編成の参考資料とする。
4月	小学校入学 国際教室での取り出し指導開始	通級希望者	日本語力を把握しているため、国際教室での指導を入学後すぐに開始することができる。 外国籍児童生徒コーディネーターと情報を交流する。(資料10) 適応できない児童の授業中の支援について相談する。

資料10 外国籍児童生徒コーディネーターからの情報

(3) 入学前・入学後の日本語能力の測定と特別な教育課程の編成・再編成

①日本語力調査結果

日本語力調査結果を表5のように集計した。平均正答率は、64.1%であった。90%未満の児童を国際教室への通級を促すつもりであったが、保護者の考えにより、年度当初の学習の場は下の表(表6)のような結果となった。

表5 日本語力調査結果表

番号	①名前	②年齢	③りんご	④目	⑤犬	⑥車	⑦水	⑧靴	⑨トイレ	⑩あし	⑪赤	⑫青	⑬〇	⑭いたい	⑮書く	合計	正答率	備考	判定結果
201			○	○			○	○			○		○			6	40%	減額?	国際
207	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	14.5	97%	ずらずら話す	
204			○			英	○									2.5	17%	落書きなし	国際

表6 日本語力調査結果と学習の場

正答率	0～29%	30～59%	60～89%	90～100%
人数	3人	8人	11人	4人
学習の場	国際教室 1人 特別支援教室 1人 通常の学級 1人 (保護者の希望)	国際教室 7人 通常の教室 1人 (保護者の希望)	国際教室 8人 通常の教室 3人 (保護者の希望)	国際教室 4人 (4月以降適宜学級 担任と相談し国際教 室を修了)

②特別な教育課程の編成・再編成（日本語1のカリキュラム編成）

4月入学してすぐに日本の学校生活への適応指導（資料11）を重点的に行った。学習内容によって適宜入り込み指導や取り出し指導を行い、少しでも日本の学校生活についての不安を取り除き、安心して学校に通うことができるように支援した。国際教室で通訳の支援を受けながら母語と繋げて学校のルールや日本の学校生活について学習することで、日本語による授業に対してもまずは、「聞く」ことを徹底して指導した。通常の学級担任も国際担当者も動作や絵・写真などを示して話すようにしているので、話している人の方を見て話を聞くように繰り返し指導した。楽しく日本語に親しむために幼児向けの歌や動画を使って50音、数、曜日、日付などをリズムに合わせて覚えていくことができた。

命を守る訓練や学校探検など学校行事や学年行事に関わるものは、児童が戸惑うことが無いようにあらかじめ内容について通訳に支援に入ってもらって説明をした。そうすることで落ち着いて行事に参加することができた。

家庭学習の定着を図るため、毎日国際教室から「書く」プリントと音読の宿題を出した。はじめは全員が提出することができなかったが、家庭連絡をして保護者にも協力を求めた。宿題内容について話を正しく聞き取ることを毎時間繰り返した。

所属学級でも理解できる日本語が少ない中でも話を集中して聞こうとする姿が見られた。

資料11 日本語1のカリキュラム 活動例

③就学前の日本語調査を習得レベルのチェックに活用

6月下旬に再度同じ検査を実施し、実態を把握した。通常の学級担任の指示に従えているか、語彙が増えているか、定着度合を把握するために同じ調査を実施した。国際教室通級児童については表7に示すような結果になった。就学時健診の時64.1%の正答率が94.2%となり基本的な語彙は理解できるようになった。また7月上旬に実施されたひらがな50音を書くテストでは国際通級児童全員が合格することができた。

一方4月当初、国際教室への通級を希望しなかった児童は、ひらがなの読み書きがなかなか定着できず、通常の学級担任の指示を理解して所属学級での国語の学習に参加することができない状況が続いた。1名は転出したが、3名はひらがなテストでも不合格となった。保護者と連絡をとり、まずはひらがなの読み書きができるまでは国際教室での学習をすすめた。

今後の学習内容の定着状況によっては、特別支援教育コーディネーターにつなげる参考資料とする。

表7 2023年度 入学後の日本語力調査結果（6月下旬実施）

正答率	0～29%	30～59%	60～89%	90～100%
国際教室通級児童	0人	0人	4人	18人

（4）通常の学級担任との連携

4月初めの学校生活のルールについては、必要に応じて入り込み指導をした。1週間の学習予定を前の週に提出してもらい、あらかじめ通訳の支援をうけて母語で理解させる必要のある内容については、国際教室で指導し、当日児童が戸惑うことがないように配慮した。通常の学級担任の指示を聞いてやれることが増え、周りの子と関わりながら活動する姿が見られた。

3 実践の成果と課題

（1）国際家庭の日本の学校教育への適応について

保護者も日本の学校文化について経験や知識が少ない場合が多い。わが子が日本語の授業を理解できるか、日本の学校に適応していけるか不安を感じている。就学時健康診断（以下、就学時健診）の際、日本語力調査を実施することで生活言語能力を測るものさしの1つとして保護者に目安を示すことができた。日本語力調査結果で90%以上得点できていても取り出し指導を希望する保護者がいた。しかし、4月の国際教室での学習の様子や通常の学級担任からの在籍学級での様子についての報告を受け、在籍学級での学習への移行を勧めることができた。正答率が20%未満の得点であっても、保護者が取り出し指導を希望しなかったため通常の学級で国語の授業を受けた児童もいた。しかし、言葉が通じないことでクラスの友達とのトラブルが相次ぎ、ひらがなも数個しか読み書きできない状況になった。6月下旬には泣いて登校をしぼるようになり、通常の学級担任や国際担当教員、通訳職員の再三のすすめでようやく国際教室に通いはじめたというケースもあった。国際教室で通訳職員の支援のもと日常生活の困ったことなどを母語で話すことができるようになり、元気に登校するようになったというケースもあった。就学時健診や入学式の際、国際教室のシステムや学習言語習得の難しさ、通常で困っていることを丁寧に説明し理解してもらえるようにしていく必要がある。

（2）市内外国籍児童生徒コーディネーターとの連携について

市内外国籍児童生徒コーディネーターを通じて、幼稚園や保育所に日本語の力に弱さがある子どもについて園でも簡単な日本語の力を付ける取り組みを実施してもらうように連携を図ったり、未就園の子どもの情報を把握したりすることで、学校生活にスムーズに適応していけるように保

護者へサポートをすることができた。就学時健診時に日本語力調査結果をもとに園に通っていない家庭に対して外国籍児童生徒コーディネーターから働きかけをしやすくなった。入学後の早い時期に授業を参観し学校生活に適応できているか児童の様子の情報交換することができ、連携の重要性を実感することができた。

（3）入学前・入学後の日本語力の測定と特別な教育課程の編成について

やる気に満ち溢れている4月の入学時から、国語の時間に国際教室での取り出し指導で外国籍の仲間と共に学習することで日本語を学ぶモチベーションを高めることができた。また通訳職員と話す場があることで児童はいつでも困ったことがあると相談することができる。在籍学級でのトラブルにも迅速に対応することができ、日本の学校に早く適応することができ在籍学級の教室よりいきいきと活動する児童が多く安心して過ごすことができる場となった。

日本語がほとんどわからない時期から、「聞く」指導に重点をおき、ジェスチャーや実物、イラストなど視覚的な情報からなんとなく理解できるという経験をさせ、話を聞く大切さを繰り返し指導した。時々通訳から母語でのフォローが入るので次第に通常の学級での指示が理解できるようになってきた。学習した日本語で担任や通訳に話す活動を仕組んでいくことで間違いを恐れずに話してみようとする経験を国際教室の中でさせた。そうして日本語に少しずつ慣れていくことで、在籍学級や学年で外国につながるのある児童のみでグループを作ってしまうということもなく、担任やクラスの仲間と良好な関係を作っていくことができた。

6月下旬の調査結果を見ると明らかに語彙は増えていた。対面でのおしゃべりでは日本語を使って担任や日本人のクラスの友達と関わる姿が見られる。ひらがなも書ける。しかし、話し言葉から書き言葉への移行にはハードルが高い。文字だけでなく文書を読む、書くという活動を意識的計画的に行い、国際教室修了につなげることが必要である。

第4章 特別支援学級の実践

第1節 外国につながるのある児童におけるスヌーズレン教育の実践

1 はじめに

（1）実践における児童の実態

外国につながるのある児童は、文化の相違や自分の思いが伝わらないもどかしさ、学習の習得面等で日々ストレスを抱えており、対人関係がうまくいかない児童も増えてきている。

（2）スヌーズレン教育について

昨年度、岐阜県立希望ヶ丘特別支援学校夏期研修会においてISNA日本スヌーズレン総合研究所名誉会長姉崎弘氏より「自立活動におけるスヌーズレン教育の基礎と授業づくり」について拝聴した。姉崎氏はスヌーズレン教育について以下のように定義している。

「スヌーズレン (MSE) 教育とは、人の視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚・固有受容覚・前庭感覚等の五感を心地よく刺激する光や音 (音楽)、香り、味、固い・柔らかい、運動・動作等の教材・教具を用いた学習活動に集中して取り組めるように、教室の明るさを暗幕等で調節でき雑音をできる限り排除した安全な環境の中での学習活動で、対象児の好む感覚刺激を用いた快適な多重感覚環境を教室内外に工夫して設置し、その中で感覚刺激を媒介として教師と対象児および対象児同士が相互に共感し合い学習中の心地よさや楽しさを共有し合い、対象児のもつ教育的ニーズ (発達課題) のある集中力や認知面、感覚面、情緒面、運動面、対人関係面、コミュニケーション面等における心身の発達を促し、支援する教育活動である。」¹⁾

また、「スヌーズレンの理念は、障害のある人の障害の種類や程度を問わず、さまざまな障害のある人が活動できる。さらに障害がある人だけではなく、幼児や成人、高齢者までも幅広い人にも活用できるもの」と国立特別支援教育総合研究所の報告がある。日本のスヌーズレン教育の実践は、主に重度・重複障害児を対象に行われ、特別支援学校や小学校特別支援学級、通級指導教室で主に個別指導での実践例が公開され、心理的な安定と学習や生活への意欲が向上したという結果を得ている (国立特別支援教育総合研究所 大崎博史、石川政孝 (2007年) : 教育相談におけるスヌーズレンの活用—重度・重複障害のある子どもの主体性を尊重した環境づくり— 国立特別支援教育総合研究所教育相談年報 28、国立特別支援教育総合研究所 編、7-12)。

これらの実績や動向をふまえ、本校の特別支援学級の外国につながるある児童にとってスヌーズレン教育は有効なのではないかと考えた。この本校には、ホワイトルームのような専門のスヌーズレンルームや代表的な機材はないが、テントを暗幕で囲ったり、手作りのスヌーズレンボトルを設置したりすることでスヌーズレン環境を整えた。



写真5 スヌーズレントtentの様子

その結果、スヌーズレンがもたらす効果として外国につながるある児童の情緒の安定が認められた。そこで今年度は、自立活動にスヌーズレン教育を取り入れ、非言語の活動 (体験活動) から言語化 (日本語の習得) を目指すことにした。心理的な安定やコミュニケーションを円滑に行うことができるようにし、日本語の言語活動を図る実践を行った。

2 実践の内容

(1) 実践の対象と方法

- ・対象 特別支援学級児童（知的障害学級・かがやき7組）
- ・方法
 - スノーズレン活動を通して、児童と支援者（教師）と環境の三項関係を大切にしながら、
 - 児童の自主的な言葉や行動に寄り添うスノーズレン活動を行う。
 - 特別支援学級の自立活動にスノーズレン活動を取り入れ、スノーズレンルームで光や音、香りを味わい、スノーズレンルームに飾る絵画を制作する。
 - 他の特別支援学級の児童に紹介し、交流を行う。
- ・検証方法
 - 特別支援学級のスノーズレン活動と自立活動の内容や言語活動を関連付ける。
 - 特別支援学級抽出児童の変容と自立活動の内容や言語活動との関連づけを分析する。

知的障害学級では、外国につながるのある児童に対しDLA（JSL対話型アセスメント）による日本語能力を測定し、特別な教育課程を編成し指導を行っている。入級してくる児童の中には、日本語通訳の支援が得られず（特別支援学級には通訳は配置されていない）、日本語での意思疎通ができないことから、感情的・攻撃的になり、情緒が不安定になってしまう児童もいる。本学級かがやき7組も在籍児童8名中6名（昨年度は8名中7名）が外国につながるのある児童であり、自分の思いが伝わらず情緒が不安定になっている児童がいた。昨年スノーズレン活動を行ったところ、全体的に情緒の安定が得られたため、本学級の2名（5年生）の児童を抽出児とし自立活動と言語活動の目標を設定した。

(2) 児童の実態

①A児 5年女子

- 実態
- ・小学校1年生にフィリピンより来日。日本語による意思疎通が難しい。やさしい日本語の指示は理解できる。英語やタガログ語、ビサヤ語での日常会話ができる。小学校1年生まで母語で読み書きの指導を受けていた。家庭では主にビサヤ語（タガログ語の方言）を話す。
 - ・教員の指示の内容は分かっていないが、全体の動きを見て行動することができる。
 - ・成育歴から、対人関係でトラブルが多い。
 - ・ひらがな五十音表を用いて短い文を読むことができるが、意味は分からず読んでいる。
 - ・ひらがな五十音は9割読むことができるが、すぐ忘れてしまう。
 - ・練習すれば五十音を書くことができるが、すぐ忘れてしまう。
 - ・DLA（はじめの一步）語彙力チェック85%（2024年6月）

< J S L 評価参照枠のステージを参考にした児童の実態 >（2024年6月）

話す ステージ1 読む ステージ1 書く ステージ1 聴く ステージ1

資料12 J S L 評価参照枠のステージを参考にした児童の実態

<自立活動の目標>

- ・情緒面が安定し、落ち着いて学校生活を送ることができる。

<言語活動の目標>

- ・スヌーズレン活動を通して自分の気持ちを日本語で伝えることができる。
- ・身の回りのものと文字全体のイメージが結びつき、文字の意味が分かる。

②B児 5年男子

- 実態
- ・生まれも育ちも日本で、日本語で簡単な会話ができる。
 - ・ひらがなを読んだり書いたりすることができる。
 - ・家庭ではビサヤ語・タガログ語・英語を話す。
 - ・教師の指示が一度では通らず、個別に何度も声をかけると行動できる。
 - ・精神的に幼く、自分の意に沿わないことがあると大声を出して暴れる。
 - ・DLA（はじめの一步）語彙力チェック96%（2024年6月）

<JSL評価参照枠のステージを参考にした児童の実態>（2024年4月）

話す ステージ2 **読む** ステージ1 **書く** ステージ1 **聴く** ステージ2

<自立活動の目標>

- ・気持ちをコントロールし、情緒の安定を図ることができる。

<言語活動の目標>

- ・スヌーズレン活動のよさを日本語で仲間に伝えることができる。
- ・言葉に含まれる音の順番や、音の数を意識した言葉遊びを行い、楽しみながら読みの力をつけることができる。

(3) スヌーズレン活動と自立活動の関係について

スヌーズレンの教育的ねらいと自立活動の6区分との関係について東京都立光明学園奥山氏他は以下の表8のように示している。2)

表8 スヌーズレンの教育的ねらいと自立活動との関係

自立活動の区分	スヌーズレンのねらい
①健康の保持	・生活のリズムを整える ・自分の生活を自ら管理する ・運動動作の向上 ・情緒の安定とリラクゼーションをはかる
②心理的な安定	・情緒の案とリラクゼーション ・場面の変化を受け止める
③人間関係の形成	・他者との関わりを促す ・集団の中で状況に応じた行動ができる
④環境の把握	・視覚・聴覚・触覚などの感覚を活用する ・自分の好みの音や感触を通して快・不快を表現する

自立活動の区分	スヌーズレンのねらい
⑤心身の動き	<ul style="list-style-type: none"> ・運動動作の向上 ・自ら身体を動かし目的のものに触ったり場所へ移動したりする
⑥コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション能力の向上 ・状況に応じた言語環境の中で内言語を豊かにする

スヌーズレン活動は自立活動の6区分と深く関わることから自立活動でのスヌーズレンの効果に期待できるのではないかと考える。

(4) 研究の結果と考察

①特別支援学級のスヌーズレン活動と自立活動の内容や言語活動との関連について

梅沢京子氏「活動段階と自立活動の項目」を参考に、本学級でのスヌーズレンの活動内容と自立活動の内容、言語活動に分類・整理し、表9に示した(梅沢京子(2021年):小学校特別支援学級におけるスヌーズレン教育の意義、上越教育大学教育実践研究第31集、223-228)。

表9 活動段階と自立活動・言語活動の内容

活動段階	主な活動	活動内容	自立活動の内容						言語活動の内容	
			健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション		
創作・体験	スヌーズレンロボットづくり	諸間隔を使って遊ぶ	(1)	(1)	(4)	(1)	(4)	(1)	選択肢の中から感想や思いを選び日本語を練習する	
		俳句を作る			(1)			(2)	感想から適切な語彙を選び伝える	
体験	ブラックライトパネルシアター	ブラックルームでパネルシアターを鑑賞する		(2)		(1)		(1) (3)	選択肢の中から感想や思いを選び、3語文程度の感想を書き伝える	
創作活動	蛍光クレヨンのお絵かき(かがやきハロウィン)	いろいろな遊びを試す	(4)	(2)	(2)	(1)	(4)	(1)	選択肢の中から感想や思いを選び日本語で伝える	
		友達と新しい遊びを試す		(2)	(2)	(4)	(4)	(3) (5)	選択肢の中から感想や思いを選び日本語で伝える	
紹介活動	共同制作(蛍光絵の具でおえかき)・ポスター作り(かがやきクリスマス)	新しい飾りを作る	(4)	(2)				(5)	選択肢の中から感想や思いを選び日本語で伝える	
		仲間と新しい飾りやポスターを作る			(2) (3)			(5)	(1)	その場に応じた日本語を学び、ポスターを書く
		いろいろな人に楽しさを伝える			(1) (2) (3)				(1)	場に応じた必要な日本語を話す

このことから、一連のスヌーズレン教育が自立活動の6つの内容全てにおいて関連があり、日本語習得における言語活動にも有効であると考えられる。

外国につながるのある児童の場合、日本語の語彙が少ないため自分の思いや気持ちを的確に言葉にできないことや相手の質問に的確に答えられないことがある。そこで、振り返りとして選択肢に○をつけるアンケート形式を行い、スヌーズレン教育の感動を日本語に表出することで、仲間に感動を伝えられるようにした。活動するごとに繰り返し選択肢アンケートを行い、自ら体験した思いを言語化した。繰り返し言語化することで、選択した言語が般化され語彙を増やし日常生活に生かすことができると考えられる。抽出児2人に共通して「ゆっくりできる」などの「健康の保持」、「楽しい」などの「心理的な安定」、「友達と遊べる」「みんなと遊べる」などの「人間関係の形成」「コミュニケーション」に関連が見られた。



写真6 スヌーズレン
ペットボトルの様子



写真7 スヌーズレンの
振り返りの交流

②特別支援学級抽出児童の変容と自立活動の内容や言語活動との関連

姉崎氏（姉崎弘（2019年）：スヌーズレンの理論と実践方法―スヌーズレン実践入門―、大学教育出版、26-28）のスヌーズレン設立の5つの基本要件（「環境設定」「自己選択」「主体性」「やりとり」「共感」と照らし合わせ、東氏・姉崎氏の小学校の通級指導教室での実践（東法子、姉崎弘（2018年）：児童の気持ちの変容から見るスヌーズレンの授業の教育的意義、スヌーズレン教育・福祉研究第2号、42-51）を参考に外国につながるのある児童の変容について検証した。

ア スヌーズレンテントについて

今年度は、特別支援学級の教室の一角に2m四方のスヌーズレンブラックテントを設置し、スヌーズレン教育を行った（図4）。光の刺激としては、家庭用プラネタリウム、ブラックライト、蛍光クレヨンや蛍光絵の具で児童がそれぞれ製作した作品を飾った。SnoezeLab.のスヌーズレンのために作られた楽曲集で温かい音楽を準備し、また5種類のアロマオイルを準備し、どの香りが自分にあっているのか選択できるようにした。心理的に安定した環境の中で、保有する感覚を活用し、楽しむことができる学習として、光・音・香りの3つの刺激を題材にして、視覚・聴覚・嗅覚及びその他保有する感覚を総合的に活用することをねらいとした宮崎県立清武せいりゅう支援学校「光音香の学習」³⁾を参考にスヌーズレンテントを設営した。

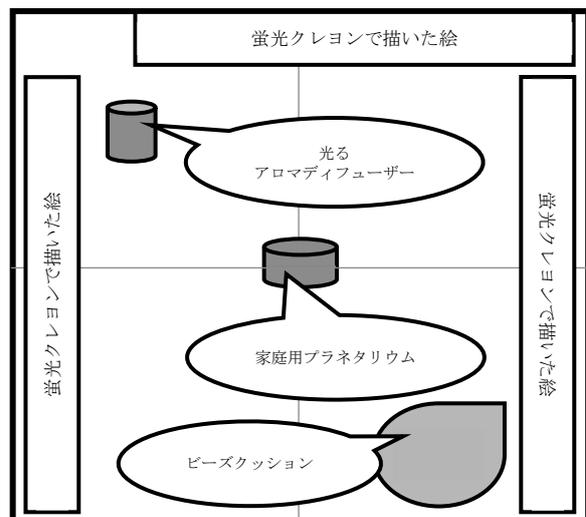


図4 スヌーズレンブラックテント

イ 活動内容

(ア) ブラックルームパネルシアター

NPO法人スヌーズレンを普及する会より「びっくりはなび」「スイミー」を借りて鑑賞した。この活動はブラックルームテントでの創作活動への導入として行った。広い音楽室で行ったり、スヌーズレンブラックテントで行ったりと複数回上映したが、その都度楽しむことができた。どの作品も好評で「きれい」「楽しい」「もっと見たい」という感想をもつことができた。ブラックルームパネルシアターを行う中で「次はこんなことがしたい。

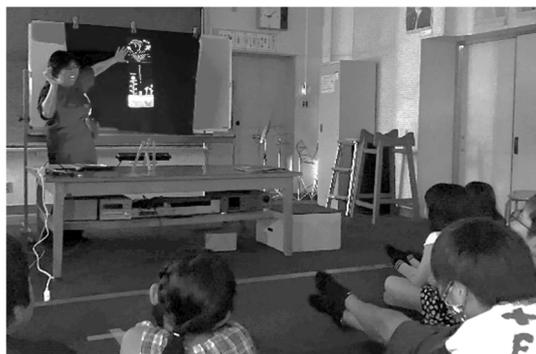


写真8 ブラックルームパネルシアター

やってみよう。」と主体的に自分自身を見つめ、自分なりの目標をもって生きていこうとする意欲につながるようにした(写真8)。

(イ) 創作活動

ブラックルームパネルシアター後、児童たちに「次はどんなことをしたいですか。」と問いかけた所、何も返答がなかった。今までも教師が提案するものは素直に楽しむことができるが、自分から何かを創作し発信するという能動的思考が育ってきていないものとする。そこで児童の生活圏内の100円均一ショップやスーパーマーケットでよく目にする光景から「かがやきハロウィン」を教師から提案し、創作活動や紹介活動を通して自ら次につながる活動へと考える道筋をつくることにした。

・「かがやきハロウィン」

蛍光クレヨンを使ってハロウィンのキャラクターを描き、スヌーズレンブラックテントに飾った。思い思いに自分が飾りたい場所を選び、ブラックライトで光らせた。ハロウィン用の音楽をかけ、ハロウィンの衣装を着た上でスヌーズレンブラックテントに入った。自分の作品がどこにあるのか、またどのように光るのか楽しむことができた(写真9、10)。

A児：「美しい」「楽しい」「心が落ち着く」と英語表記に○をつけたので、日本語でも言えるように練習した。

B児：こちらから声をかけると「おもしろい」「楽しい」「友達と遊べる」に○をつけた。

自分たちで楽しんだ後、今度は他の特別支援学級(8学級・50人)のみんなを招待しようと、ポスターに色を塗ったり、役割を決めたりすることができた。学級数が多いので2日間に分け、テントに入るのは1学級3分までとした。



写真9
ブラックテントの様子



写真10
かがやきハロウィンの様子

招待するためには、ポスターに書かれた日時や場所を伝える必要がある。また当日も、かがやきハロウィンに来た特別支援学級の子たちに案内をしなければならない。どんな声掛けが必要で日本語がわからない子には英語で説明が必要になるなど、話し合っ決めていき、必然的な言語活動を仕組むことができた。

・「かがやきクリスマス」

「かがやきハロウィン」の成功を受け、次はクリスマスや冬のものを描きたいと児童から思考するようになってきた。クリスマスや冬のものも児童の生活圏内にある100円均一ショップやスーパーマーケットにあるものであり、想像力を働かせやすい題材である。今度は交流学級の友達を招待したいと計画を練っているところである。

(ウ) 言語活動

第二言語としての日本語の習得のプロセスには、日本語のインプットがなければ習得は進まない。インプットをインテイクにするためには、「音／文字」と「意味・使い方」が結びつく必要がある。インテイクを自分の知識にするためには、目立たせたり、繰り返したりする必要がある(京都教育大学 浜田麻里(2024年):岐阜県総合教育センター講座「外国人児童生徒等教育の基礎」)。そのため、日本語の習得には、文字を読む前提として「日本語のたくさんの言葉を知っていることが大事」である。言語には内言語と外言語があり、話をしたり文字を書いたりするのは外言語といい、外部に表出するための言語である。読み書きは基本的に外言語であるが、この外言語を支えるのが内言語である。内言語とは知っている言葉であり、知っている言葉が多ければ表出する言葉も比例して多くなる。また知っている言葉が少ないと、比例して外言語も少なくなる。そこで読み書きを獲得するために、まずたくさんの言葉を知っていることが重要になる(株式会社児童発達支援協会 鴨下賢一編著(2022年):マンガでわかる読み書き指導、中央法規、19)。

A児もB児も幾度となく日本語の語彙を増やすために、DLA「はじめの一步」で使われている55の絵カードや愛知教育大学「外国人児童生徒支援リソースルーム」の絵カード等を使用し語彙の習得をめざしてきた。DLA「はじめの一步」の絵カードをやり始めた当初は自分の生活圏にないものは母語でも言うことができなかつたり、日本語でもなかなか覚えられなかつたりした。DLA「はじめの一步」の絵カードで練習を重ねた結果、正答率がA児31%(2023年9月)→84%(2024年9月)、B児69%(2023年9月)→96%(2024年6月)と向上した。



写真 11

絵と言葉をマッチングするB児

さらに日本語の語彙習得のために、白い紙には蛍光塗料が使われていることに着目し、ブラックライトと蛍光教材を用いれば、より集中して語彙習得に取り組むことができるのではないかと考えた。このことは、姉崎弘氏・加藤大晴氏の「小学校の通常の学級在籍児童の学習への集中力を高めるスヌーズレン教育の実践—ブラックライトと蛍光教材を用いた算数指導の効果の検証—」(スヌーズレン教育・福祉研究第4号、49-60)で、スヌーズレン環境における学習が、児童の学習への集中力を高める可能性があることを示唆している。

B児は、ブラックライトで照らされて光る文字パッドや絵カードをマッチングし、集中力が途切れることなく落ち着いて学習することができた。これは、B児にとって身近な語彙が習得できていることから、楽しんで学習できたと思われる（写真11）。

A児にも、同様のマッチング練習を行ったが、絵カードを見てそれが何かは分かるが文字との対応がまだ難しいため、集中力が途切れてしまった。最初は絵カードのみを使用し、その絵が何か練習する場を設けた所、集中して取り組むことができた。

3 実践の成果と課題

(1) 成果

スノーズレン教育という非言語的な活動から言語化にせまる取り組みから、2点の教育的意義が明らかになった。1つ目は、スノーズレン教育は自立活動の6つの内容の全てと関連しており、児童らが主体的に活動しようとする意欲を高める教育活動ということである。

自立活動の内容に照らし合わせると、抽出児2人に共通して「ゆっくりできる」などの「健康の保持」、「楽しい」などの「心理的な安定」、「友達と遊べる」「みんなと遊べる」などの「人間関係の形成」「コミュニケーション」に関連が見られ、言語活動にもつながったことから、心を動かされる活動から言語化へとつながる道筋ができたと考えられる。2つ目は、スノーズレン教育は、外国につながるのある児童の日本語習得の手立ての一つとなるということである。特にA児、B児とも話す力が伸びたと思われる。JSL評価参照枠のステージでは、A児はステージ1からステージ2に、B児はステージ2からステージ3に向上した。個々の心理的な安定から、より集中して日本語習得への意欲につながったと感じられる。

A児

話す

 ステージ2

B児

話す

 ステージ3

(2) 課題

課題としては次の2点が考えられる。1つ目はスノーズレンブラックテントには活動制限があることである。4㎡のスノーズレンブラックテントでは、少人数での利用が前提となり、特別支援学級全員（5年生8人）が入っての活動が難しい。また、締め切った部屋の活動であり、空気がこもってしまうなど換気に十分配慮が必要になる。交流学級の児童たちへの招待では、人数や時間の制限を設けるなど、児童のニーズに寄り添うことのできるスノーズレンテントの在り方を考えていきたい。2つ目は、言語活動としてブラックライトと蛍光教材を用いたスノーズレン教育は、対象児に言語習得の楽しさを実感させ、学習への意欲を高めることができたといえるが、その学習効果に対する十分なエビデンスが得られていないことである。対象児らは、ブラックライトと蛍光教材を用いたスノーズレン教育を行ったことで比較的話す力が伸びたと思われるが、日々の学校生活全般でも日本語を習得していることも起因すると思われる。

今後、A児には絵カードと言葉のマッチングから絵カードから言葉を当てはめる活動で語彙を増やすこと、B児には濁音や半濁音、促音や長音、拗音などが含まれている言葉、形容詞や動詞、助詞等の習得を目指す予定である。日本で生活していくためには日本語の習得が必要である対象児にとって、スヌーズレン教育は日本語習得のための必然的な教材であると考え、今後も検証していきたいと考える。

第2節 特別支援学級に在籍する外国につながるの児童への学習支援

1 はじめに

知的障害特別支援学級で担当する児童は、2年生3人（日本2人、ブラジル1人）、4年生5人（フィリピン3人、ブラジル2人）の8人である。8人中6人が外国につながるの児童である。いろいろな国籍の児童がいるが、国籍関係なく関わり合いながら生活している。外国につながるの児童が多いので、特別支援学級の教室を国際教室の隣に配置し、いつでも国際教室の担当教員や通訳職員に支援を受ける体制を整えている。

2 実践の内容

(1) 入学時から知的障害特別支援学級在籍するA児への支援

① A児について

A児は、入学時から知的障害特別支援学級に在籍している現在2年生の女児である（表10）。

表10 A児の実態

入学前の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・入学前の1年間、地域の保育所に通っていた（日本の保育園）。 ・加配の保育者がついていた。 ・保育所より、特別支援学校への入学を勧められた。
家族構成	<ul style="list-style-type: none"> ・父、母、本人、弟の4人家族。 ・母は日本語を話すことができる。（日本の小学校に通っていたため） ・父は日本語を話すことができない。
家庭内言語	<ul style="list-style-type: none"> ・母とは日本語とポルトガル語。父とはポルトガル語。
療育手帳	<ul style="list-style-type: none"> ・あり（B1）
入学直後の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・お気に入りのフレーズを声に出すことはあったが、ほとんど意味のある発語がなかった。 ・自分の思いは問いかけに対してうなずくことで表現していた。 ・うれしいこと、困ったこと、痛かったことなどほとんどの感情を泣くことで表現していた。 ・嫌なことがあると、床に寝そべて動かないこともあった。

②A児への実態把握

A児の実態を把握するために、行動観察とアセスメントを行った。

A. 行動観察

A児と生活する中で、社会性・コミュニケーション、好きなこと、得意なことを見つけた(表11)。

表11 行動観察の結果

社会性・コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none">・おだやかな性格。・人と関わるのが好き。・言葉でのやりとりは難しい。
好きなこと	<ul style="list-style-type: none">・自分の興味のあるもの(キャラクターや動物など)の絵をかくこと。・歌を歌うこと。・ダンスを踊ること。
得意なこと(強み)	<ul style="list-style-type: none">・周りの人(学級の仲間、先生)の会話をよく聞いており、真似して話そうとする。・歌の歌詞は何度繰り返し聞くと、おおよそ覚えることができる。・見たキャラクターや動画の一場面を覚えて、紙にかくことができる。・ダンスの振り付けを覚えるのが得意。繰り返し動画を見ながら踊ると覚えて、見本を見なくても踊ることができるようになる。

B. アセスメント

A児が言葉でのやりとりが難しく、他の検査を行うことが難しかったので、グッドイナフ人物画知的検査を行った。グッドイナフ人物画知的検査は、一人の男の子を描出させる、非言語性検査である。検査の所要時間は10分程度である。人の絵を描くだけの検査のため、児童への負担が少ないのが特徴である。また、言語能力を必要とせず言葉の遅れに関わらず検査をすることができる。A児は日頃から絵を描くことが好きのため、抵抗なく取り組むことができた。この検査をした当時は、普段から男の子や男の人の絵を描かず、検査中も男の子の絵を描くよう促したが女の子の絵しか描かなかったため、女の子の絵で判定した(図5)。



図5 A児の人物画

検査の結果DAM-IQは80であった。非言語領域において、知的能力が極端に低いわけではないことが分かった。A児に合ったペースや方法で学習を進めていくことにした。

保護者は、日本語の語彙を増やし、日本語を話して生活できるようになってほしいと願っている。そこで、A児の日本語の語彙を増やすこと、日本語で自分の思いを伝えることができるように支援していくことにした。

③ A児の実態に合わせた基礎的な日本語の指導（ひらがな・ことばの指導）

4月当初は、座って45分間の授業することが難しく、いろいろな活動を取り入れた授業を行っていた。

A. 国際教室で使っている教材を使った指導

国際教室でひらがなを覚えるために使っていた歌を特別支援学級の国語にも取り入れた。A児は歌を歌うことが好きなため、ひらがなを覚えるためのきっかけになるとよいと考え、授業の初めに動画を使って「あいうえおのうた」を歌うことにした。画面を見て音を聞きながら歌うことで正しく音と字を一致させることができる良さがあった。A児は初め画面を見ているだけだったが、何度も繰り返し聞くうちに、部分的に声を出すようになり、歌を覚えて楽しく歌うようになった。国語の授業だけでなく、休み時間や家でも歌うようになったり、知っているひらがなを自分から読んだり文字に興味をもつようになった。他にも、カタカナの歌、日付や曜日の歌、数字の歌があり、歌って楽しみながら覚えることができた。

B. カードをつかったひらがな練習

「ゆびなぞりカードひらがな」（くもん出版）を活用し、文字の指導を行った。このカードは文字がくぼんでいてなぞることができるようになっていて、いきなり鉛筆で書くよりも、指でなぞることで、字の形を動作でとらえて覚えやすくなり、スムーズに書きに移行できる。初めは教員が「み」「みかん」と読んだものを聞いてなぞっていたが、次第にA児は、「み」と声を出しながらなぞったり、文字の隣に書いてある字を一文字ずつ指で押さえて読もうとしたりする姿（写真12）が出てきた。スムーズに指を動かせるようになってきたので、ひらがなプリントを使った文字指導に移行した。1年生の6月下旬には、手本がなくても「あ」から順番にひらがなを書くことができるようになった（写真13）。ひらがなの読み書きができるようになったことで、この頃から、絵本の絵だけに注目するのではなく、書いてある字にも注目し、声を出して読むようになった。母親が家でも本を声に出して読むことが増えたと話していた。

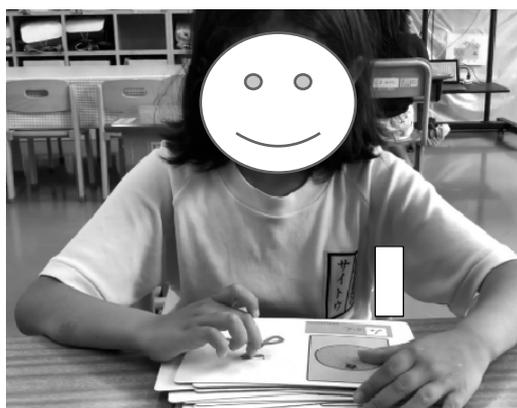


写真12 A児がなぞりカードに取り組む様子



写真13 A児が書けるようになったひらがな

C. 絵カードを使った語彙を増やす指導

A児は、4月当初は、ものの名前を聞いてもほとんど答えることが出来なかったため、絵カードを使い、物の名前や動きの言葉、気持ちの言葉、反対言葉など、日常生活で使う言葉の学習をした。ものの名前の語彙を増やすときには、カードを見せてものの名前をまねて言う練習、教員がカードを見せ、「これなあに。」という教員の声かけに答える学習を繰り返した。カードを並べて「いらっしゃいませ。」「〇〇ください。」「どうぞ。」「ありがとう。」という言葉のやり取りをしながらお店屋さんごっこをした。やりとりを楽しみながらものの名前を覚えることができた。動きの言葉の学習では、動作を取り入れて学習した。「走る」「歩く」「立つ」「座る」などよく使う言葉を中心に行った。実際に走ったり、歩いたりして言葉の音、文字、動作がつながるように指導した。繰り返し学習していく中で、A児は、カードにあるイラストを見てすらすらと答えることができるようになった。獲得した言葉を学習だけでなく、他の場面でも使うことがあった。給食を見ながら「みかん」「だいこん」と、使われている食べ物を指さして話したり、休み時間に教師や友達に絵カードを見せてものの名前を答えさせるようなやりとりをしたりしていた。

(2) 特別支援学級全体で行ったM I Mを取り入れた学習

学級の外国につながるのある児童は、生まれたときから日本で過ごしているため、日本語で日常会話をするのにほとんど困らない児童もいれば、小学校入学前や入学後に日本に来たためか、まだまだ日本語での日常会話も難しい児童もいる。学級全体の言葉についての課題として、日本の児童も外国につながるのある児童も

- ・日本語の語彙が少ない。
- ・ある程度語彙はある児童も、促音や長音、幼音等の特殊音節の読み書きの定着が不十分。

ということがあげられる。

そこで、多層指導モデルM I Mを取り入れた言葉の指導（ことばのたつじんの時間）を週に1回行うことにした。多層指導モデルM I Mとは、子どもの異なるニーズ、さまざまなニーズに対応した指導・支援をしていこうとするモデルである。M I Mには、アセスメントがついており、アセスメントをすることで、何に困っているかがわかり、その結果に基づいた指導ができる。また、手の動きで言葉を表すので、書くことが苦手な児童も、動作化して学習することができる良さがある。

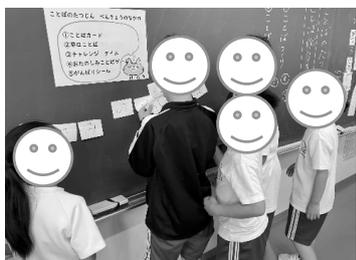


写真14 学級全員で言葉集め
ゲームをする様子

資料13 「ことばのたつじん」の1時間の流れ

資料14 「ことばのたつじん」の時間の子どもの様子

資料15 学習の記録を残すカード

3 実践の成果と課題

①A児への学習支援のまとめ

A児の実態を把握するための1つの手段として、グッドイナフ人物画知的検査を使った。A児の好きな絵を描く課題だったことや検査時間が短くできることで、やりとりが難しいA児に無理なく検査をすることができた。おおよその知的能力を推測することができ、A児に合った学習計画や支援計画をたてることができた。

カードを使ったり、教師とやりとりをしたりしながら学習することでA児は楽しんで学ぶことができ、語彙の獲得や言葉の表出にもつながった。

2年生7月の個人懇談で、A児の母親からA児が家で弟に日本語を教えているというエピソードを聞いた。弟にコップを見せ、「これなんだ。」と聞き、「コップ」と教えているそうである。正しい言葉を言うまで何度も練習していると言っていた。また、家庭の中で自分の学んだ言葉を弟に伝えている姿が見られるようになった。今後も、国際教室と特別支援学級の教材を交流しながら、特別支援学級に在籍する外国につながるある児童の学習指導について考え、実践していきたい。

②特別支援学級全体で行ったMIMを取り入れた学習のまとめ

月に1回アセスメントを行った。(2年生1人はアセスメントを行っていない。)正しい表記の語を素早く認識できる力を見るテスト①と、語を視覚的にまとまりとして素早く認識できる力を見るテスト②がある。4月と比較して、どの児童も得点が上がった。少しずつではあるが、学習を進めていくうちに、点数が上がっていき、児童も、前よりもできたという思いをもつことにつながった(表12)。

表12 学級のアセスメント結果

☐	4月☐	総合計の最高点☐
A児(2年ブラジル)☐	1☐	17☐
B児(2年日本)☐	9☐	27☐
C児(4年ブラジル)☐	12☐	19☐
D児(4年フィリピン)☐	5☐	11☐
E児(4年フィリピン)☐	4☐	12☐
F児(4年ブラジル)☐	12☐	27☐
G児(4年フィリピン)☐	9☐	15☐

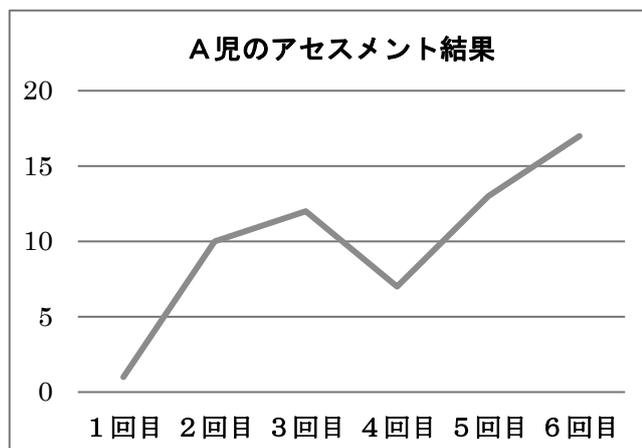


図6 A児のアセスメントの結果

表13 A児のアセスメント6回目までの累積結果

テスト①							テスト②						
清音	濁音・ 半濁音	長音	促音	拗音	拗長 音	カタカ ナ	清音	濁音・ 半濁音	長音	促音	拗音	拗長 音	カタカ ナ
10	5	7	5	3	6	4	5	4	5	1	1	2	1

(1) で取り上げたA児の結果を詳しく見ていくと、少しずつではあるが、正解数が増えている。表記のルールが身に付いていたり、語彙が少しであるが増えたりしたと考えられる。清音の言葉は正しく読んだり、見つけたりすることができるが、促音など苦手なものもある。苦手な部分のルールの定着や語彙を増やしていきたい(図6、表13)。

学級全体で見ていくと、一斉で促音や幼音などの表記のルールを学習したことで、普通の授業の中で、ノートを書くときに、どこに促音が入るのか自分から確かめたり、教師と一緒に手を叩いて確かめることで表記を正しくしたりすることができるようになった。また、しりとりやなかま集めなどの言葉遊びをするときに、スムーズに言葉が出るようになった。月1回のアセスメントをもとに、必要な指導や支援を考えて実践していきたい。

第5章 研究の成果と今後の展望

1 研究の成果

本研究は、国際教育と特別支援教育の立場から就学前後の外国につながる児童の課題を明らかにし、就学前後の児童の実態把握の方法、校内支援体制の整備、アセスメント、指導・支援内容について検討し実践することを目的として取り組んだ。

校内では特別支援加配教頭、国際教室担当、特別支援学級コーディネーター、特別支援学級担任で連携し、校内支援体制の見直しやアセスメント、支援・指導について何度も繰り返し検討を行った。また、定期的に外部の専門家との協議会を行い、取り組みを見直し、校内だけではなく広い視野で検討した。

その結果、国際教室担当は就学前に日本語能力調査を行い、入学前に学習の土台となる力を付けるための取組や日本語能力調査の開発を実施し、日本語能力の伸びを見ながら指導を進めた。特別支援教育コーディネーターは就学後の児童の支援・指導を検討するために、校内支援体制の整備や子どもの実態把握のための検査や校内校外の連携を行い、おおまかな校内支援の流れを確立することができた。特別支援学級の担任は、就学前から支援学級に入級する児童の言語習得度や知的能力などアセスメントを行い、児童の実態に応じた取組を実施し、言語習得に迫ることができた。

2 今後の課題・展望

今後、本研究の成果を踏まえて、実践をさらに積み重ね、国際教室と特別支援学級が連携し、外国につながるのある児童の適切な学びの場や支援・指導を行っていく必要がある。

- ・児童に実態把握を行うためには、日本語能力、知的能力、生活適応力そして成育歴や家族の関係など多角的な視点が必要である。個々に寄って異なるために、1人1人を慎重に見ていくことが大切である。
- ・就学前の取組は、言語習得の土台作りや学校生活にスムーズに移行するために継続して日本語能力調査を実施し、それを生かすには園との連携は必要不可欠となる。外国につながるのある児童の通う幼稚園、保育所は多様になってきているので、どの子どもにも就学前の取組が行われるようにしていく。
- ・校内校外の連携では、校内支援体制を整備し、人事異動があり、関わっている教職員が変わっても、続いていく体制を整える。校外への連携は個ではなくチームで行っていく。
- ・学びの場を整備し、国際教室、発達通級指導教室、特別支援学級、通常の学級で柔軟に学びの場を変更することができるようにする。児童の実態を掴み、保護者や本人の願いに寄り添い、合意形成をしながら進めていく。

引用文献・参考文献

- 1) 大蔵 守久 (1999) 「日本語学級 ①初期必修の語彙と文字 凡人社
初期必修語彙 修得度診断テスト
 - 2) 岐阜県教育委員会 (2023) 外国人児童生徒教育に係る「カリキュラム」及び「ワークシートに
ほんごワークブック・ことばのべんきょう
- 第4章 第1節
ア 研修会の資料
- 1) 姉崎弘 (2023年) : 岐阜希望ヶ丘特別支援学校スノーブレン研修会
イ 単行本
 - 2) 3) 全日本スノーブレン研究会監修 (2022年) : 使ってみようスノーブレン、ジューアス教育
新社、60-61、84-87
- 第4章 第2節
- 1) 小林茂雄・伊藤健次 (2016) : グッドイナフ人物画知能検査新版ハンドブック 三京房、7
 - 2) 海津亜希子・杉本陽子 (2016) : 多層指導モデルMIM アセスメントと連動した効果的な読
みの指導 Gakken、8-16

謝辞

この度、このような研究の機会を与えくださり、研究助成をしていただきました公益財団法人みずほ教育福祉財団の皆様には深く御礼申し上げます。また、本研究を特別支援教育研究助成論文としてご推薦いただいた独立行政法人国立特別支援教育研究所の皆様にも深く感謝申し上げます。

本研究の計画から論文作成にいたるまで、丁寧にご指導ご助言をいただきました独立行政法人国立特別支援教育総合研究所情報・支援部総括研究員滑川典宏様には心からの感謝を申し上げます。WEBだけではなく、実際に現地に足を運んでいただき、子どもの様子を見ていただいた上でミーティングを行うことができたことで、迷っていることや疑問に思うことが解決でき、研究の出口に向かって進むことができました。常にあたたかいお言葉と的確なご指導をいただきましたことは研究チーム全員のやる気と自信につながりました。また、インクルーシブ教育システム推進センター研究員 冠 雄佑様にも多くのご示唆をいただきましたことに感謝申し上げます。

本研究の実践にあたって、夏には横須賀市を視察させていただきました。横須賀市教育委員会事務局や横須賀市諏訪小学校の皆様には大変お世話になりました。外国につながる子どもたちが多く在籍する地域の学校の実態と取組を目の当たりにし、本実践を進める上で新たな見地を得ることができました。

秋には日本LD学会でポスター発表をする機会を与えていただき、他県の先生方に本研究を知っていただき、感想やご意見をいただきました。同じ悩みや研究を行っている方たちと交流したことで、研究を前進させる刺激をいただくことができました。

本研究の実践は、外国につながる子どもが集住している学校での試みです。多文化共生をかかげ、どの子ども笑顔で生活できる学校をめざし実践しました。しかしながら国際教室は必要な子どもたちがいるすべての学校にあるわけではありません。現在、本市は、外国につながる児童生徒数が増えていることと、散在化が進んでいます。さらに外国につながる支援が必要な子どもたちが増えています。学校という枠を超えて汎用性のある支援を行っていく仕組みや支援の方法を求めて研究を継続して進めていかなければならないと痛感しています。国籍を超えてすべての子どもたちが笑顔で学ぶことができる環境を切に願って実践を重ねていきます。

巻末資料

・資料1 校内教育支援委員会の位置付けと役割の変化

	支援委員会の主な役割	担任	校内教育支援委員会構成員	特別支援教育コーディネーター
2017年	全校で周知する場	・児童の様子や保護者の希望を伝える。	<p><当日></p> <p>支援が必要な児童について知る。</p>	<p><事前></p> <p>・相談を受け、児童の様子を把握する。</p> <p><当日>司会進行</p>
2021年頃	<p>全校で周知する場</p> <p>児童の実態を掴む場</p> <p>発達通級指導教室の校内判定</p>	・児童の様子や保護者の希望を伝える。	<p><事前></p> <p>・教頭、特別支援教育コーディネーター、発達通級指導教室担当→発達通級指導教室を利用する児童においては、支援委員会の前に児童の様子を観察し、発達通級指導教室の利用が妥当かどうか検討する。</p> <p>・学年主任→支援委員会前に学年会で校内教育支援委員会に挙げる児童を検討する時間を取り、学年で話し合う。クラスの児童について情報交流を行う。</p> <p><当日></p> <p>・教頭、特別支援教育コーディネーター、発達通級指導教室担当→児童の様子を発言する。</p> <p>学年主任→児童の様子、学年で話し合ったこと、方向性を発言する。</p> <p>・関わったことがある構成員は、そのときの様子を発言する。</p>	<p><事前></p> <p>・相談を受け、児童の様子を把握し、支援や指導について検討する。アセスメントを実施し、児童の実態を掴む。保護者との懇談を実施し、保護者と合意形成し、方向性を検討する。</p> <p><当日>司会進行</p> <p>・関わっている先生を把握し、意見を求める。</p> <p>・アセスメントの結果を説明する。</p>

	支援委員会の主な役割	担任	校内教育支援委員会構成員	特別支援教育コーディネーター
2023年	<p>児童の実態を多角的に捉える場</p> <p>適切な支援・指導を検討する場</p> <p>連携できる場を検討する場</p> <p>学校全体として特別支援教育に取り組む場</p> <p>発達通級指導教室の校内判定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の様子や保護者の希望を伝える ・支援について相談し、助言を受ける。 	<p><事前></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教頭、特別支援教育コーディネーター、発達通級指導教室担当→発達通級指導教室を利用する児童においては、支援委員会の前に児童の様子を観察し、発達通級指導教室の利用が妥当かどうか検討する。 ・学年主任→学年会で支援委員会に挙げる児童を検討する時間を取り、学年で話し合う。クラスの児童について情報交流を行う。 <p><当日></p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成員→児童の様子を発言する。実態を掴むための情報共有を行う。これまでの経験を活かし、実践されてきた支援の方法を提案し、支援の方法について検討する。 ・学年主任→児童の様子、学年で話し合ったこと、方向性を発言する。 	<p><事前></p> <ul style="list-style-type: none"> ・相談を受け、児童の様子を把握し、支援や指導について検討する。アセスメントを実施し、児童の実態を掴む。保護者との懇談を実施し、保護者と合意形成し、方向性を検討する。 ・多くの教員が関わっている際、ケース会を開催し、共通理解し、支援の方向性を検討する。 <p><当日>司会進行</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の様子について多くの情報を集め、有効な支援や方向性についてまとめる。

・資料2-① 専門性の向上の取組 職員全員で特別支援教育に関わるために取組

<p>【4月】 個別の教育支援計画の引継ぎ (校内サポート会) 学年主任に学年の支援に関わる 児童について伝える。</p>	<p>【職員会】情報提供 ・すべての教員が身に付けるべき 基礎的な知識を職員会で提示。 資料に入れ、少しの時間で伝える。</p>	<p>【夏季研修】校内研修 発達障害 最新の特別支援教育の動向 など</p>
<p>【学年会】学年で検討 校内教育支援委員会に挙げる 児童を学年会で共通理解し、検 討する。 学年主任は児童の様子を観察 し、支援を検討する。</p>	<p>【校内教育支援委員会】 校内で支援が必要な児 童について全員で支援 について意見を出し合い、 検討する。</p>	<p>【療法士訪問】 理学療法士・言語療法士 の訪問を活用。医学の立 場の意見を頂く。</p>
		<p>【支援学校のセンター的機能】 センター的機能を活用。特別 支援教育の専門家の意見を 頂く。</p>

*療法士訪問とは、可児市教育委員会が行っている事業である。学校が希望すると、地域の病院の理学療法士、言語療法士などが来校し、療法士が児童の様子を見て、児童の実態を分析し、担任や通級指導教室担当、特別支援学級担任は支援や指導の仕方のアドバイスを受けることができる。

・資料2-② 専門性の向上の取組 特別支援学級担任・発達通級指導教室担当の専門性の向上の取組

<p>【自主研修の開催】 ・Vineiland適応行動尺度 ・KABC-II ・外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA ・特別支援に関わる児童の就労など</p>	<p>有志で集まり、休日や夏休みに勉強会を実施。放 課後デイの先生や高校の先生を講師に招く。 今年度は岐阜県総合教育センターの「自ら学ぶ 教職員研修事業」を活用。</p>	
<p>【研修に参加】 ・特別支援学校主催の研修 ・岐阜総合教育センターの研修 ・地域で行われている研修</p>	<p>【資格取得】 ・特別支援教育士 ・学校心理士 など</p>	<p>【見学】 ・放課後デイ ・近隣の高等学校 ・多文化共生センター</p>
<p>【夏休みの勉強会】 ・近隣の専門性のある先生を 講師とした勉強会</p>		

・資料3 検査の特徴と実施状況

検査名	主な特徴	分かること	外国につながるのある児童にあって感じた
WISC-IV	5～16歳の子ども の知能を測定。	・知的機能を表す4つの主 要指標得点（V C I、P R I、W M I、P S I） と全般的な知能を表す 合成得点（F S I Q）が 算出できる。	○認知能力の参考値を測ることができる。 ●言語の力は必要な課題が多く、外国につな がりのある児童の数値は低めに出ること が多い。 ●通訳が入って通訳しても、文化の違いや言 語の違いにより難しい課題がある。
WISC-V	W I S C の 最新版。 5～16歳 の子ども の知能を 測定。	・知的機能を表す5つの主 要指標得点（V C I、V S I、F R I、W M I、 P S I）と全般的な知能 を表す合成得点（F S I Q）が算出できる。	○認知能力の参考値を測ることができる。 ○ <u>非言語性能力</u> が出るため、WISC-IVよりも 言語に困難さがある場合に有効である。 ●通訳職員が入って通訳しても、文化の違い や言語の違いにより難しい課題がある。
日本版 KABC-II	2歳6ヶ月 から12歳11 ヶ月の子 どもの認 知能力を 測定。	・認知処理過程と習得度の 両面から評価できる。 ・認知処理は継次処理と同 時処理、学習能力、計画 能力の4つの能力から 測定できる。	○言語を必要としない課題から <u>非言語性</u> の 数値が出る。 ○習得尺度から学習の力を見ることができ る。 ●検査時間が長く、子どもへの負担がある。
グッドイ ナフ人物 画知能検 査（D A M）	3歳～8歳 6ヶ月（健常 児）	・知能を測ることができる。	○5分程度の短時間でできる。 ○言葉を必要としないため、実施しやすい。 ○絵を描くことを嫌がる子は少ないため、子 どもへの負担が少ない。 ●詳細な能力を判定するものではないため、 他の検査とともに行う必要がある。
STRAW-R 改訂版 標準読み 書きスク リーニン グ検査	小学1年生 から高校3 年生までの 音読速度や 漢字の音読 年齢が算出。	・ひらがな、カタカナ、漢 字の3種類の読み書き の比較ができる。 ・漢字がどの学年まで読む ことができるか漢字音 読年齢が分かる。	○日本語の読み書きの力を測ることができる。 ○ひらがな、かたかな、漢字の読み書きのど の段階で困難さがあるのか把握すること ができる。 ○発達通級指導教室や特別支援学級に在籍 している児童に実施するとどこが困って いるのかが分かり、指導に活かしやすい。 ●外国につながるのある児童で特別支援学 級への入級を考えている児童には負担が 大きい。

検査名	主な特徴	分かること	外国につながるのある児童に使用して感じた
LDI-R LD判断 のための 調査票	小学校1年 ～中学校3 年のLDの 可能性を判 断。	・基礎的学力(聞く・話す・ 読む・書く・計算する・ 推論する・英語・数学) と行動・社会性を測るこ とができる。	○担任など児童を良く知る教師が実施して、 LDの判断ができる。 ○外国につながるのある児童で認知能力が 高い児童に実施するとLDの可能性を検 討することができる。 ●外国につながるのある児童の困難さはL D傾向だけではないことが多いため、他の アセスメントの方が実態を掴みやすい。
PVT-R 絵 画語い発 達検査	3歳0カ月 から12歳3 カ月の言葉 の理解力の 発達度を判 断。	・語彙の習得度を測ること ができる。指差して回答 することができるため、 言語表出ができなくても 使用することができる。	○指差して答えることができるため、実施し やすい。 ○日本語と母語で実施して両方の言語習得 を図り比べることができる。 ●外国につながるのある児童にとって抽象 的な言葉の理解は難しい。
J. COSS日 本語理解 テスト	3歳～高齢 者、聴覚に障 害のある方 の日本語の 理解度を判 断。	・文法理解の習得度を測る ことができる。 ・図版には問題文を口頭で 提示する聴覚版、自分で 文を読んで答えるよう に問題文が書かれてい る視覚版がある。	○形容詞・動詞や文法の理解度が分かる。細 かくわかる。 ○発達通級指導教室や特別支援学級に在籍 している児童がどの語彙で困っているの かが分かり、指導に活かしやすい。 ●詳細な能力を判定することは難しい。他の 検査とともに行う必要がある。
外国人児 童生徒の ためのJ SL対話 型アセス メントD LA	日本語の能 力の習得段 階を判断。	・日本語の習得度を把握し、 指導方針を検討するこ とができる。 ・日常会話はできるが、教 科学習に困難を感じる 児童が対象	○繰り返し行って日本語力の伸びを見るこ とができる。 ○学習すべき内容や領域を絞り込むこと ができる。 ○児童の思考言語の様子を見ることができ る。 ●詳細な能力を判定することは難しい。他の 検査とともに行う必要がある。

検査名	主な特徴	分かること	外国につながりのある児童に使用して感じた
Vineland 行動尺度	0歳0カ月～92歳11カ月の適応行動を評価する検査	・コミュニケーション、日常生活スキル、社会性、運動スキル、不適応行動の5つで適応行動を測ることができる。	<p>○適応行動でどの領域に困難さがあるか把握することができる。</p> <p>○生活の中で、できるようにしていくことが分かる。</p> <p>●児童のことを良く知る保護者による回答が必要である。</p> <p>●外国につながりのある児童の保護者に聞き取るためには、通訳が入る必要があること、学校に来てもらうことの難しさから実施することが難しい。</p> <p>●結果をもとに家庭や放課後デイなどの生活の中での取り組みの必要がある。学校で取り組むことが難しいことがある。</p>

資料4 連携先と連携内容

<p>【児童が利用する放課後デイサービス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏休みなどの見学 デイでの様子を見たり、情報共有をしたりする。 ・ケース会を実施。デイの個別の教育支援計画の情報共有を行う。学校やデイでの困難さや支援していることの情報共有。 ・デイの行事を見学 学校以外の場所での頑張りを知ることができる。児童の頑張りを認めることができる。 ・ケース会を実施し、学校、福祉でできることを検討する。 	<p>【中学校の特別支援学級主任、特別支援教育コーディネーター】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引継ぎ（情報の引継ぎ、支援計画の引継ぎなど） ・中学校の特別支援学級について、進路などについて学ぶ。
<p>【地域の高等学校】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校の進学、授業について学ぶ。 ・高校の先生を招いて勉強会の実施。 	<p>【医療（主治医、相談員）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者から同意を得て、主治医とのやりとりを行う。
<p>【特別支援学校】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域支援センターに相談を実施。訪問で児童の様子を観察し、助言を受ける。 ・可児市の教育支援委員会では、支援の方向性や指導について助言を受ける。 	<p>【特別支援教育主幹教諭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の判定や支援・指導の相談を行う。 ・就学時健診の際、就学児童の様子観察をお願いする。
<p>【放課後等デイサービス顧問、特別支援教育士、療法士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勉強会の講師を依頼、アセスメントを学ぶ。 （KABC-II、Vineland行動尺度等） ・STRAW-R 改訂版 標準読み書きスクリーニング検査の実施の様子を見学し、検査や読み書き障がいの支援を学ぶ。 	<p>【可児市 多文化共生センター】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見学、懇談を実施 多文化共生センターの取り組みを学ぶ。 ・ケース会 多文化共生センターを利用している児童の情報共有、支援について共有理解する。
<p>【地域の通級担当教員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・検査の依頼 ・支援・指導の助言を受ける。 	<p>【岐阜県総合教育センター】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育、国際教室担当の研修に参加 DLAや外国籍児童の指導について学ぶ。 ・自ら学ぶ教職員研修事業に申請し、研修を開催。
<p>【地域の高校通級担当】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校通級指導教室、特別支援学級の子どもの進学の相談。 ・福祉就労について学ぶ。 	<p>【地域の療法士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・可児市教育委員会の療法士訪問を依頼し、言語療法士、作業療法士等の助言を受ける。
<p>【可児市教育支援委員会担当】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の判定について相談。 	<p>【岐阜県の多文化共生センター、三重県多文化共生センター】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修会に参加。

・資料5 2023年 1年生対象の判定テスト

国際教室 入級判定テスト

- 名前を教えてください。
- 何歳ですか。
- 誕生日はいつですか。
- だれといっしょに住んでいますか。 あなたの家族を教えてください。

2023年 5月

1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30
31					

5. 今月のカレンダーを指して、「きょう なんにち？」と聞いて答えさせる。
6. 今月のカレンダーを指して、「なんようび？」と聞いて答えさせる。
7. 絵を指して、「何？」と聞いて答えさせる。

8. 数字を指し、「何？」と聞いて答えさせる。

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
10 15 20 100

9. 「すいかの数は なんこ？」「バナナの数は なんこ？」と聞いて答えさせる。

		<input type="text"/>	<input type="text"/>
--	--	----------------------	----------------------

10. 「これ 何？」と聞いて、物の名前や位置を答えさせる。

11. 図形を指して、「どんなかたち？」と聞いて、答えさせる。

--	--	--

12. 絵を指して、「なにいろ？」と聞いて、答えさせる。

13. 絵を指して、「何？」と聞いて、答えさせる。

14. 吹き出しを指し、「なんて言ってる？」と聞いて答えさせる。

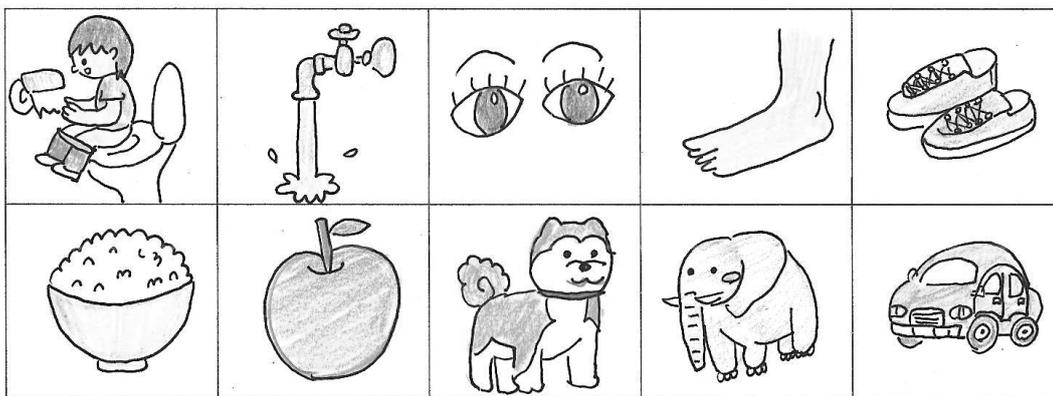
15. ひらがなを指して、読めるか答えさせる。

あ	ぬ	れ	ん	け
な	ほ	て	す	む

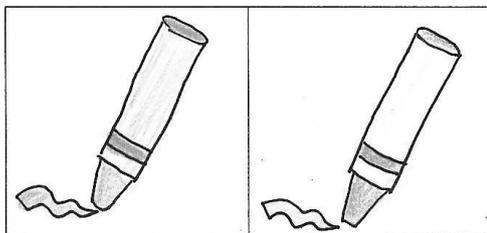
16. 「自分の名前がひらがなで書ける？」と聞いて、えんぴつで書かせる。
(書く用紙は、記録用紙の空きスペースが望ましい。)

国際教室 入級判定テスト

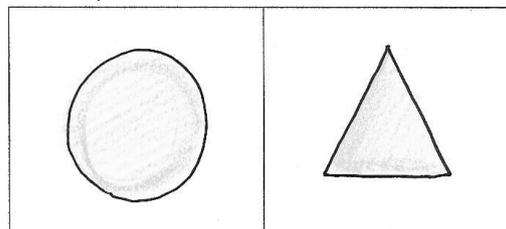
1. 名前を教えてください。
2. 何歳ですか。
3. 絵を指して、「何？」と聞いて答えさせる。



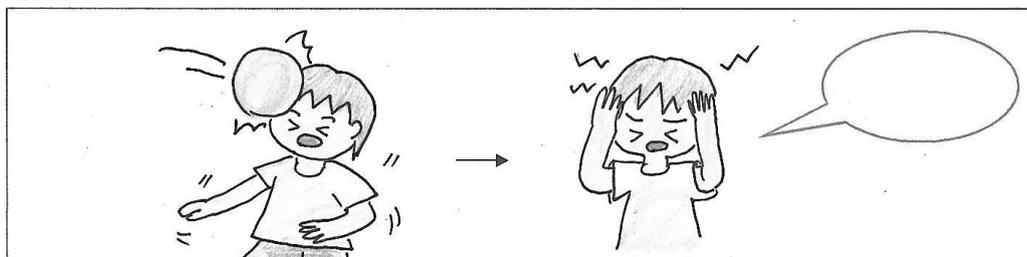
4. 「なにいろ？」と聞いて答えさせる。



5. 「どんなかたち？」と聞いて答えさせる。

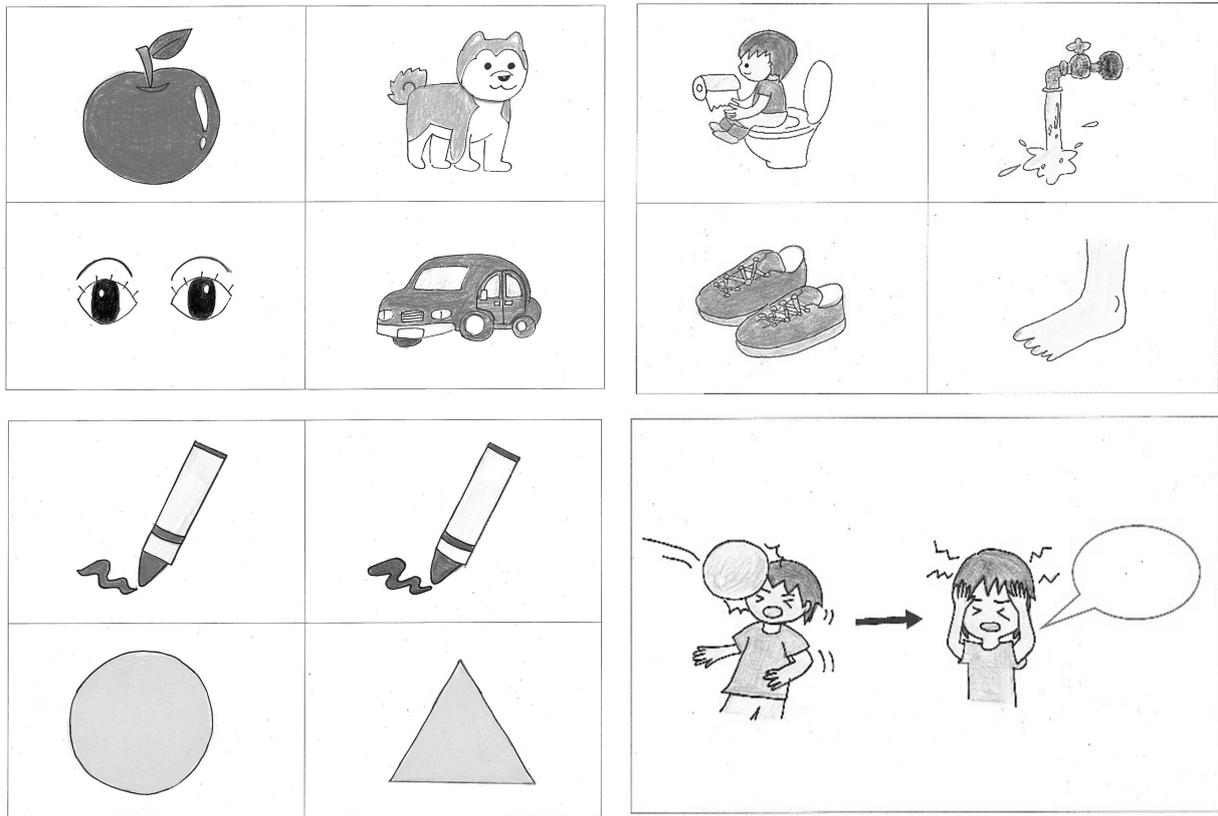


6. 吹き出しを指し、「なんて言ってる？」と聞いて答えさせる。



7. 「自分の名前をひらがなで書ける？」と聞いて、えんぴつで書かせる。(記録用紙のうら)

・資料7 2024年度 新1年生対象 就学時健診 日本語力調査 完成版



なまえ



写真15 日本語調査時の様子

・資料8 日本語力調査 実施要項

就学時健診時 国際教室 日本語力調査 実施要項

1. 目的

- ・新1年生の日本語の基礎的会話能力・語彙力を知ることが目的とし、国際教室に通級する必要があるかどうかを判定する資料とします。

2. 対象

- ・外国籍児童全てを対象とします。
- ・就学時健診の言語検査の時間に実施します。

3. 方法

- ・こどもの正面に向き合わずに、机の角を挟んで座ります。子どもと同じ目線でカードが見られます。また威圧感を軽減することにもつながります。
- ・どんな日本語レベルであっても最後にほめてあげて、名前(自分の絵)の横に好きなシールを貼らせてあげます。

4. 実践

各質問に対して10秒くらいたっても答えがなかったら「どうですか」とうながす。

1. あいさつ：こんにちは。私は(自己紹介)です。

2. 説明：これから、〇〇さんが日本語でどのくらいおはなしができるか知りたいです。
わかることを話してくださいね。わからないときは、「わかりません。」と言ってね。

3. 質問：
- ① 名前を教えてください。
 - ② 何歳ですか。
 - ③ りんごはどれですか。指でさしてください。
 - ④ 目はどれですか。指でさしてください。
 - ⑤ (犬の絵を指して)これはなんですか。
 - ⑥ (車の絵を指して)これはなんですか。
 - ⑦ 水はどれですか。指でさしてください。
 - ⑧ くつはどれですか。指でさしてください。
 - ⑨ (トイレの絵を指して)これはなんですか。
 - ⑩ (あしの絵を指して)これはなんですか。
 - ⑪ 赤色はどれですか。指でさしてください。
 - ⑫ (青の絵を指して)これは何色ですか。
 - ⑬ ○はどれですか。指でさしてください。
 - ⑭ ボールが当たってしまいました。なんと言っているでしょう。
 - ⑮ 自分の名前をひらがなで書けますか?ここに書いてください。
(書けそうにない場合)〇〇さんのお顔の絵を描いてください。

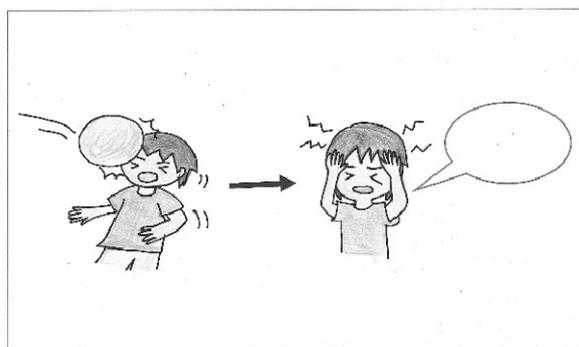
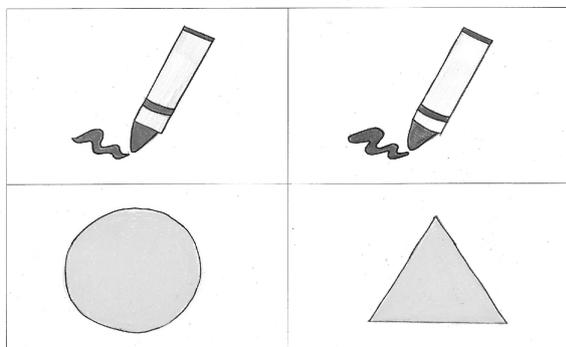
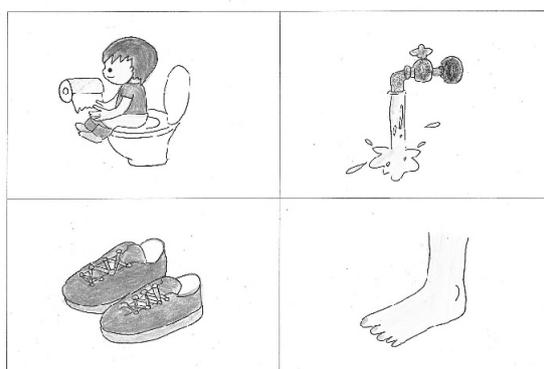
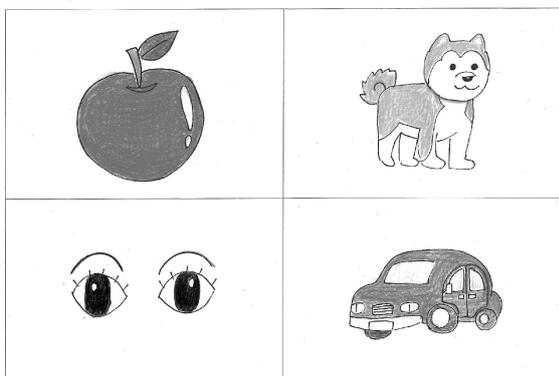
4. あいさつ：頑張りましたね。ごほうびに好きなシールをあげます。ここにはってください。

4月に今渡北小学校で待っていますね。これで終わります。

国際教室 入級判定テスト 記録用シート

受付番号 _____ 名前 _____ (男・女) _____ 年 _____ 月 _____ 日

番号		正答	誤答	無回答	備考
1	自分の名前				
2	年齢				



話す	語彙	書く	合計	正答率
2	12	1	15	%

No	名まえ	国籍	性別	来日	就園	ひよこ教室での様子【よいところ】	ひよこ教室での様子【気になるところ】	保護者について
1	A.児	B	女	2020年 (1月可見市へ 転居)	ブラジル人託児所 (〇〇県) 1/22～ 平日ひよこ	<ul style="list-style-type: none"> ・クリエイティブな遊びや活動を楽しむことができる。 ・日本語で「おはよう、だめ、トイレいいですか」など言える。 ・ひらめき、勘がいい、適応能力がある。 ・言葉が違って友達と仲良くできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気が強い(手が当たっただけで不機嫌。謝罪が受け入れられない) ・主張が強く頑固でわがまま。 ・大人っぽいしぐさをする。足を組む。 ・かまってほしくて甘えたりわがままをいう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・以前は実母と暮らしていた。 ・現在は父と義母と同居。 ・実母は口市在住。春休みにはE.Nは口市に行っていた。 ・義母(日本育ち日本語ok)はひよこ教室に送迎。 ・ひよこ修了式にも父と義母は参加し嬉しそうに娘の写真を撮っていた。
2	B.児	F	女	2024.2.19	△市の幼保 2 月～ZION + 平日週4ひよこ +日曜日ひよこ	<ul style="list-style-type: none"> ・泣くことがあるが声をかければ泣きながらも頑張る。 ・周りを見て行動することができる。 ・先生の話をしっかり聞いている。 ・適応能力がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・母を思い出し泣くことがよくある。 ・一度泣くモードになるとしばらく続く。一日に4回泣いていたこともあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・両親は2020年来日。 ・フィリピンでは祖母が養育していた。 ・姉の懇談の際、母は「M.Aや弟が幼い頃から親と離れて暮らしていて可哀そうだった」と泣いていた。 ・ひよこ修了式には母が出席。
3	C.児	F	女	以前から在住	6/6～ZION +平日週2ひよこ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語を理解している。 ・休みが多いが教室に来た日はしっかりやれる。明るい性格 	<ul style="list-style-type: none"> ・ZION・ひよこ休むことが多い。 ・大人の顔を伺いながらやる。 ・おしゃべりが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者に連絡しても繋がらないことがあった。 ・姉(今北小2年生)学校を休みがち。
4	D.児	F	男	以前から在住	ZION +平日週2ひよこ	<ul style="list-style-type: none"> ・慎重な性格だが能力はある。 ・手先は器用、のりやはさみできる。 ・手を出すことはない。 ・笑ったり泣いたり感情が豊か。 ・発表や当番の仕事はしっかりやる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と言葉で言い合うことがある。 ・注意を受けると落ち込む。 ・手は出ない泣いたり笑ったり 	<ul style="list-style-type: none"> ・母は在日が長く日本語で簡単な会話ができる。 ・年の離れた姉2人、兄がいる。親戚や従兄弟が多い。
5	E.児	F	女	以前から在住	SHEKINAH +平日週2ひよこ	<ul style="list-style-type: none"> ・作品などはダイナミックに描く。 ・ポテンシャルは持ってる。時間をかければ発揮できそうに感じる。 ・慣れている人には対応できる。 ・先生の手をわずらわせることはなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の顔を伺って合わせたりする。そのため出だしが遅れることがある。 ・日本語の発話は少なく声が小さい。 ・授業参観にきたが赤ちゃんいるから我慢する 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者は授業参観に来ていた。 ・下の子がまだ小さくA.Eが我慢しているように見えた。
6	F.児	F	女	以前から在住	ZION +平日週2ひよこ	<ul style="list-style-type: none"> ・当番の仕事はやる。(言葉は自分では言えないため復唱) ・色などがやっと少し言えるようになったが覚えるのに時間がかかる。 ・友だちともめることはない。 ・周りは見ている。手先は器用。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大人しいが聞いてないのでわかっていない。 ・日本語の言葉がなかなか入らない。 ・やり取りが最後までオウム返しだった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・親は持ち物など準備をしっかりやってくれている。
7	G.児	F	男		以前は日本の幼保 →ZION +平日週2ひよこ	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会の当番がしっかりできる。 ・休まない。 ・以前、日本の幼保で行き渋りを起こしていたが、サイオンでは楽しく通園。 	<ul style="list-style-type: none"> ・やる気がある時とない時のムラがある。 ・仲間の言動を「子どもっぽいから嫌」と言ったりしていた。 ・話を聞かずにおしゃべりすることもあった。 	

・資料11 国際教室（日本語1）のカリキュラム 活動例

	日 本 語 学 習 活 動	教材・教具・支援
授業 開始日から 3日間	<p>☆内容によっては、学級での指導の際、通訳の先生とともに入り込み指導</p> <p>トイレ指導・靴箱の使い方・ロッカーの使い方・持ち物 記名ランドセルの片付け方</p> <p>机や教室のロッカーの整頓</p> <p>学校からの配布物をお便りホルダーに入れ毎日必ずおうちの人に見せる。</p> <p>ハンカチは毎日持ってくる</p> <p>不要なものは持ってこない</p> <p>鉛筆は 5本 けずってくる</p> <p>授業の準備</p> <p>～さんと呼ぶ</p> <p>チャイム席について</p> <p>休み時間の使い方</p> <p>・教室ではあばれない 廊下を走らない 右側通行</p> <p>雨の日の過ごし方（本を読む お絵描き ぬりえ など）</p> <p>傘の使い方</p> <p>・傘の差し方 歩いている時 前の人との間をあける。ふりまわさない。</p> <p>・傘の持ち方 ふりまわさない。後ろの人に当たらないように立てて持つ。</p> <p>・傘のとじ方 ひもでとじる。</p> <p>水筒について</p> <p>下校について</p> <p>・コースの確認 友達の家や公園などに寄り道をしない。</p> <p>・交通ルール</p> <p>身体測定について</p> <p>・体育の服装 測定項目 並び方 待ち方</p>	<p>学活の指導に入り込んで母語で指導</p> <p>傘 水筒</p>
1時間目 名前	<p>①あいさつのしかた 「しせい」「はじめます」「れい」</p> <p>・いすのすわりかた ・あしのおきかた ・立ったあとに いすをいれる</p> <p>②わたし（ぼく）の名前は ～です。</p> <p>・ひとりひとりリピートさせる。</p> <p>・「なまえを教えてください。」と話しかけ、名前をこたえさせる。</p>	

適
応
指
導

	日 本 語 学 習 活 動	教材・教具・支援
	<p>③簡単な挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おはようございます ・こんにちは ・さようなら ・ありがとう ・ごめんなさい <p>④よく見てやってみる よく聞いてやってみる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はしの使い方 動画を見る→割りばしを各自に配付→紙皿にパスタ5個を入れて配布しチャレンジ! 	<p>動画</p> <p>子供向けおはしの持ち方解説「おはしのれんしゅう」</p>
<p>2・3 時間目</p> <p>えんぴつ のおはし</p>	<p>①あいさつ 「おはようございます。わたし(ぼく)の名前は～です。」</p> <p>列指定の先生にあいさつ→ほかの列の先生</p> <p>②「わたし(ぼく)の名前は～です。よろしくお願いします。」の練習</p> <p>列指定の先生にあいさつ</p> <p>③よく見てやってみる よく聞いてやってみる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉛筆の持ち方 動画を見る→筆箱からえんぴつを出しチャレンジ ・名前の書き方 それぞれの名前が書かれたプリントを配る <p>縦書き 指なぞり→お手本をなぞり書き→2回書く 残りは宿題</p> <p>④宿題の説明</p> <p>名前プリントを宿題ファイルに挟む。 明日提出するように説明する。</p> <p>宿題をやってきたら シールをあげる。</p> <p>⑤おはしの練習</p> <p>動画を見る→割りばしを各自に配付→紙皿にパスタ5個+スポンジを入れて配布</p>	<p>動画</p> <p>「えんぴつのもちかた トンボ鉛筆」</p> <p>子供向けおはしの持ち方解説「おはしのれんしゅう」</p> <p>おはし</p> <p>紙皿</p> <p>パスタ・スポンジ</p>
翌週	<p>給食指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備・食べ方・はしのつかいかた・片付け方 	
<p>4時間目</p> <p>なまえ</p>	<p>①入室・退室の仕方</p> <p>「しつれいします。」「しつれいしました。」</p> <p>②宿題チェック</p> <p>ファイルを机の上に出す。</p> <p>「おねがいします。」 やってきた子には シールをはる。</p> <p>③名前の練習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉛筆の持ち方 <p>動画を見る→筆箱からえんぴつを出しチャレンジ</p>	<p>動画</p> <p>「えんぴつのもちかた トンボ鉛筆」</p> <p>名前の手本</p>

	日 本 語 学 習 活 動	教材・教具・支援
	<p>・名前の書き方 それぞれの名前が書かれたプリントを配る 横書き 指なぞり→お手本をなぞり書き→2回書く 残りは宿題</p> <p>④学用品 えんぴつ ふてばこ けしごむ たいそうふく うわぐつ 赤白ぼうし 連絡ぶくろ 図書ぶくろ</p>	<p>パウチした文房具の写真 実物</p>
5時間目 自己紹介 文房具	<p>①宿題チェック ファイルを机の上に出す。 「おねがいします。」 やってきた子には シールをはる。</p> <p>②自己紹介のしかた 「わたし(ぼく)の名前は ~です。1年〇組 です。よろしく お願いします。」 ・列指定の先生にあいさつ→ほかの列の先生 ・言えたらごほうびカードにシールをはってもらう。</p> <p>③文房具</p>	<p>ごほうびカード ことばのれんしゅう 1. ぶんぼうぐ 拡大版 黒板掲示 各自 プリント</p>
6時間目 自己紹介 文房具	<p>①宿題チェック ファイルを机の上に出す。 「おねがいします。」 やってきた子には シールをはる。</p> <p>②自己紹介のしかた 「おはようございます。わたし(ぼく)の名前は ~です。1年 〇組です。 よろしくお願いします。」 ・笑顔で 相手の目を見て 聞こえるような声の大きさに話 すこと! ・列指定の先生にあいさつ→ほかの列の先生 ・シールを3つはもらえるように 自己紹介をしまわる</p> <p>③文房具 各自練習 列ごとにチェック</p> <p>④宿題の説明 ・「あいうえおのうた」を視聴する。真似して歌ってみる ・ひらがなプリント(あ行)を宿題ファイルに挟む。</p>	<p>ごほうびカード 動画 「あいうえおのうた」</p>
7時間目 ひらがな	<p>①宿題チェック ファイルを机の上に出す。 「おねがいします。」 やってきた子には シールをはる。</p> <p>②宿題の説明 ・「あいうえおのうた」を視聴する。真似して歌ってみる ・ひらがなプリント(か行)を宿題ファイルに挟む。</p>	<p>動画 「あいうえおのうた」</p>

	日 本 語 学 習 活 動	教材・教具・支援
	③自己紹介の練習 ④文房具 列ごとにチェック 言えたら シールをプリントに貼る。	
8時間目 自己紹介 ひらがな	①宿題チェック ファイルを机の上に出す。 「おねがいます。」 やってきた子には シールをはる。 ②宿題の説明 ・「あいうえおのうた」を視聴する。真似して歌ってみる ・ひらがなプリント（さ行）を宿題ファイルに挟む。 ③自己紹介の練習 ・校長先生、教頭先生 生徒指導の先生などに自己紹介をすることを予告する。	動画 「あいうえおのうた」
9時間目 自己紹介 ひらがな	①宿題チェック ファイルを机の上に出す。 「おねがいます。」 やってきた子には シールをはる。 ②宿題の説明 ・「あいうえおのうた」を視聴する。真似して歌ってみる ・ひらがなプリント（た行）を宿題ファイルに挟む。 ③自己紹介の練習 いろいろな先生のところへ行き自己紹介をしてシールをもらう。	動画 「あいうえおのうた」 ごほうびカード
10時間目 自己紹介	①校長先生・教頭先生・生徒指導の先生に自己紹介する。 ・活動の流れを説明 1) ごほうびカードを持って先生の前に行く。 2) 〈自己紹介するときのポイント〉 話すときの姿勢・笑顔で・相手の目を見て・聞こえるような声の大きさ。 3) シールをもらえたら 「ありがとうございます。」という。 ・終わった子から ひらがなプリント ②振り返りをする。 ・よかった姿を紹介し認める。	ごほうびカード
11・12 時間目 天気 曜日	①宿題チェック 直しがないうちは、文房具のカード（または実物）を言う練習 ②宿題の説明 ・「あいうえおのうた」を視聴する。真似して歌ってみる ・ひらがなプリント（な行）を宿題ファイルに挟む。	教室の後ろのあいている机に文房具のカード（または実物）を置く。

	日 本 語 学 習 活 動	教材・教具・支援
動き	③天気 ④曜日 ⑤動きをあらわす言葉 ・ジェスチャーつきで練習する。	ことばのれんしゅう 10. うごきことば 拡大版 黒板掲示 各自 プリント
13時間目 天気 曜日 動き	①宿題チェック 直しがないうちは、文房具のカード（または実物）を言う練習 ②宿題の説明 ・「あいうえおのうた」を視聴する。真似して歌ってみる ・ひらがなプリント（は行）を宿題ファイルに挟む。 ③天気・曜日 「いっしゅうかんのうた」を真似して歌う。 ④⑤動きをあらわす言葉 ・ジェスチャーつきで練習する。	動画 「いっしゅうかんのうた」
授業参観 前	担任からの依頼 掲示物 「自己紹介カード」 個別に通訳の先生に支援してもら う。 自分の顔 好きなこと 色をぬる	
4月下旬	命を守る訓練について ・避難のしかた お・は・し・もの説明 運動場の集合の しかた ・当日 心配な児童につく。	
14時間目 数字	①宿題チェック 直しがないうちは、ひらがな練習 ②宿題の説明 ・ひらがなプリント（ま行）を宿題ファイルに挟む。 ③数字	動画 「いちにさんのうた」
15時間目 数字	①宿題チェック 直しがないうちは、ひらがな練習 ②宿題の説明 ・ひらがなプリント（や行）を宿題ファイルに挟む。 ③数字	動画 「いちにさんのうた」
16時間目 日付 曜日	①宿題チェック 直しがないうちは、ひらがな練習 ②宿題の説明 ・ひらがなプリント（ら行）を宿題ファイルに挟む。 ③日付 曜日	動画 「あいうえおのうた」 「いっしゅうかんのうた」 「ひづけのうた」

	日 本 語 学 習 活 動	教材・教具・支援
17時間目 からだ	①宿題チェック 直しがない子は、ひらがな練習 ②宿題の説明 ・ひらがなプリント（わをん）を宿題ファイルに挟む。 ③日付 曜日 ④からだ 指示に従って 手で押さえる。	ことばのれんしゅう 6. からだ 拡大版 黒板掲示 各自 プリント
18時間目 自分の 持ち物	①宿題チェック 直しがない子は、ひらがな練習 ②宿題の説明 ・ひらがなプリント（あ～ん）を宿題ファイルに挟む。 ③自分の持ち物 わたし（ぼく）の～です。 ・「だれの～ですか？」の質問にこたえる練習 ・個別練習 ・ひとり一つ 文房具を前に集めこたえる練習 T:「だれの えんぴつですか？」 S1:「わたしの えんぴつです。」 T:「どうぞ。」 S1:「ありがとう。」 (慣れてきたら、Tのせりふも児童にやらせる。)	動画 ひらがなをおぼえよう！ 「あ行勉強書き方&読み 方の勉強」 ※このサイトを時間がある 時見せる。
19時間目 自分の 持ち物 色 右・左	①宿題チェック 直しがない子は、ひらがな練習 ②宿題の説明 ・ひらがなプリント（あ～こ）を宿題ファイルに挟む。 ③自分の持ち物の言い方の練習 わたし（ぼく）の～です。 ④色 色タッチ ⑤右・左・真ん中	ひらがな提示 あ～こ （電子黒板） ことばのれんしゅう 2. もちもの 拡大版 黒板掲示
20時間目 教室に あるもの	①宿題チェック 直しがない子は、ひらがな練習 ②宿題の説明 ・ひらがなプリント（さ～と）を宿題ファイルに挟む。 ③教室の中 「～があります。」 ものの名まえの練習 指さし→個別練習→先生の所へ行って言 えたらシール 次時は「～があります。」という言い方の学習だと予告する。	ひらがな提示 さ～と （電子黒板） ことばのれんしゅう 3. きょうしつのなか 拡大版 黒板掲示

	日 本 語 学 習 活 動	教材・教具・支援
21時間目 教室に あるもの	<p>①宿題チェック 直しがない子は、ひらがな練習</p> <p>②宿題の説明 ・ひらがなプリント（な～ほ）を宿題ファイルに挟む。</p> <p>③ことばのれんしゅう きょうしつのなか 「～があります。」 「な～がありますか。」 「いすがあります。」 ・拡大の絵を指し、「いすがあります。」という練習 ・拡大の絵を指し、T:「何がありますか。」C:「机があります。」 という練習 ・個別練習 ・活動の説明 3人の指導者で3つのコーナーを設ける。 T:「何がありますか。」 S:「机があります。」と 言えたらシールがもらえます。 〈中間交流〉 よかった話し方をしていた児童を前で紹介する。 〈後半の活動〉 「このへやに何がありますか？」と尋ね 子どもたちのつぶやきをきく。 「一人で言える人はいますか？」と言い挙手を促す。 T:「このへやに何がありますか？」 S:「チョークがあります。」 実物を指したり、手に持ったりして答えさせる。 慣れてきたら、T のせりふを児童にさせる。</p>	<p>ひらがな提示 な～ほ （電子黒板） ことばのれんしゅう 3. きょうしつのなか 拡大版 黒板掲示</p>
22時間目 ～が あり ます	<p>①宿題チェック 直しがない子は、ひらがな練習</p> <p>②宿題の説明 ・ひらがなプリント（ま～よ）を宿題ファイルに挟む。</p> <p>③教室の中 「～があります。」の復習 「な～がありますか。」 「いすがあります。」</p> <p>④3-④ 学習プリントに書き込む。 はさみがあります。 かさがあります。 3つ目は自由</p>	<p>ひらがな提示 ま～よ （電子黒板） ことばのれんしゅう 3. きょうしつのなか 拡大版 黒板掲示 3-④ 学習プリント 拡大版 黒板掲示</p>

	日 本 語 学 習 活 動	教材・教具・支援
23時間目 学校たんけん	<p>①宿題チェック 直しがない子は、ひらがな練習</p> <p>②宿題の説明 ・ひらがなプリント（ま～よ）を宿題ファイルに挟む。</p> <p>③学校たんけん 教室の名前を学習する。 ・教室や施設の名まえの練習 指さし→個別練習→先生の所へ行って言えたらシール 次時は「ここは～です。」という言い方の学習だと予告する。</p>	<p>ひらがな提示 ら～ん（電子黒板）</p> <p>ことばのれんしゅう 4. 学校たんけん 拡大版 黒板掲示</p>
24時間目 学校たんけん	<p>①宿題チェック 直しがない子は、ひらがな練習</p> <p>②宿題の説明 ・ひらがなプリントを宿題ファイルに挟む。</p> <p>③学校たんけん 「ここは体育館です。」の言い方を学習する。 ・教室や施設の名まえの復習 ・全部言えて シールがもらえた子から 学校たんけんに出発できると予告する。</p> <p>④3つの出発時間を設定する。 ・その時間までにシールが集まった児童は先生と一緒に学校たんけんに出かける。 ・「ここは 体育館です。」ひとりひとり 指でさしながら言わせる。 言えたら学習プリントに別の種類のシールを貼る。 ・教室にいる児童はシールが集まるまで T2と通訳の先生とで練習を繰り返す。 ・3つ目のグループには行っていない児童全員をつれて学校たんけんに出かける。 ・たんけんが終わって待っている間はワードパズルのプリントを用意しておく。</p>	<p>ことばのれんしゅう 4. 学校たんけん 拡大版 黒板掲示</p> <p>既習の学習プリントの下の段にあるワードパズルをする。</p>
25時間目 教科	<p>①教科名 教科の名前を学習する。 ・教科書・拡大版を提示する。名前の練習 指さし→個別練習→先生の所へ行って言えたらシール 次時は「1時間目は～です。」という言い方の学習だと予告する。</p>	<p>教科書・表紙をパウチしたもの ことばのれんしゅう 5. きょうかめい 拡大版 黒板掲示</p>
26時間目 教科	<p>①教科名 教科の名前を復習する。 ②「1時間目は～です。」その日の時間割を言う練習をする。</p>	

	日 本 語 学 習 活 動	教材・教具・支援
27・28・ 29時間目 家族	<p>①家族の言い方を学習する。</p> <p>・拡大版を提示する。</p> <p>指さし→個別練習→先生の所へ行って言えたらシール</p> <p>次時は「わたしの家族は、____、____、____、とわたしです。」 という言い方の学習だと予告する。</p>	<p>ことばのれんしゅう</p> <p>7—①. かぞく</p> <p>拡大版 黒板掲示</p>
	<p>①家族の言い方を復習する。</p> <p>「わたしの家族は、____、____、____、とわたしです。」と いう言い方の 練習をする。</p> <p>・個別練習</p> <p>②活動の説明</p> <p>・3人の指導者で3つのコーナーを設ける。</p> <p>T:「家族を教えてください。」</p> <p>S:「わたしの家族は、____、____、____、とわたしです。」 言えたらールがもらえます。</p> <p>〈中間交流〉 よかった話し方をしていた児童を前で紹介する。</p> <p>〈後半の活動〉</p>	
	<p>①家族の言い方を復習する。</p> <p>「わたしの家族は、____、____、____、とわたしです。」</p> <p>②おとうさん おかあさんなど正しく書く練習をする。</p> <p>学習プリント7—③に丁寧に書かせる。</p>	<p>ことばのれんしゅう</p> <p>7—②、③. かぞく</p> <p>拡大版 黒板掲示</p>

・資料12 J S L 評価参照枠のステージを参考にした児童の実態

【参考】文部科学省『外国人児童生徒のための J S L 対話型アセスメント (D L A)』

【作成】日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議

< A児 >

- 話す** ステージ1
- ・毎日使う自分の持ち物や、教室にあるものの名前を言うことができる。
 - ・支援を得て、簡単な自己紹介ができる。
 - ・周りの人が言う簡単なあいさつや短い単語、定型表現を真似して繰り返すことができる。
 - ・周りの様子を見て、行動を真似しながら、それに伴う語句を言うことができる。
 - ・自分に関する基本的な質問に対して、単語レベル（「はい（うん）」「いいえ（ううん）」）や身振り手振りで答えることができる。
 - ・ジェスチャーや表現や簡単な単語を使って、学校生活に必要な最低限の意思疎通を行うことができる。
- 読む** ステージ1
- ・日本語で書かれた自分の名前や普段よく使う単語を識別できる。
 - ・文字と音とが対応することを理解できる。
 - ・平仮名で書かれた言葉をいくつか読むことができる。
 - ・よく耳にするなじみのある短い平仮名の語を読むことができる。
- 書く** ステージ1
- ・自ら経験したことを絵や単語で示すことができる。
 - ・文字と音とが対応することを理解できる。
 - ・黒板に書かれた文字を写すことができる。
 - ・自分の名前や普段よく使う単語を書くことができる。
- 聴く** ステージ1
- ・簡単な挨拶や日常よく使われる定型表現を聴いて、繰り返すことができる。
 - ・健康や安全に関する簡単な指示を聴いて、理解することができる

< B児 >

- 話す** ステージ2
- ・聞きなれた言葉を組み合わせて、自分自身のことや身近な出来事について、主に単文を使って話すことができる。
 - ・日常的な内容についての質問に、簡単な日本語で自分の感想や考えを言うことができる。
 - ・自ら、一対一の会話に参加できる。
- 読む** ステージ1
- ・日本語で書かれた自分の名前や普段よく使う単語を識別できる。
 - ・文字と音とが対応することを理解できる。
 - ・平仮名で書かれた言葉をいくつか読むことができる。
 - ・よく耳にするなじみのある短い平仮名の語を読むことができる。

- 【書く】 ステージ1
- ・自ら経験したことを絵や単語で示すことができる。
 - ・文字と音とが対応することを理解できる。
 - ・黒板に書かれた文字を写すことができる。
 - ・自分の名前や普段よく使う単語を書くことができる。
- 【聴く】 ステージ2
- ・日常生活でよく使われる語彙・表現を聴いて理解できる。
 - ・自分自身のことについての簡単な質問を大体理解し、やりとりに参加できる。
 - ・学校での日課に関する指示を聞いて、適切に従うことができる。
 - ・学校生活に関係のある連文（2、3文）の簡単な指示や質問を、ゆっくりとした速さで繰り返し聞き、その内容を推察できる。

・資料13 「ことばのたつじん」の1時間の流れ

①ことばカード

ことばカードを見せて、何か答える活動。

カードは、果物・野菜、動物、花、木、虫、身近な道具。

②早口ことば

MIMの「はやくちことばしゅう」を活用。

記録カードをつくり、「自分で読む練習」「仲間に聞いてもらう」時間を設け、学習の跡を残す。

③チャレンジタイム

月4回あるので、主にこのような流れで行っている。

第1週 ルールを教える。動作をたくさん行う。

第2週 ルールの確認。かきとりプリント

第3週 ルールの定着。かきとりプリント。ことばのプリント

第4週 アセスメント

他にも、語彙を増やすことができるように、ことば集めゲームや幼音・幼長音のかるた、ことば絵カードを使ったクイズなどを行う。

④おたのしみことばゲーム

8人で協力できることばを使う言葉探しゲームを行う。ひらがな1文字が書かれている付箋を教室から探し、組み合わせて言葉をつくるゲーム。

⑤がんばりシール

授業の最後に、がんばりシールをはりためていく。

・資料14 「ことばのたつじん」の時間の子どもたちの様子

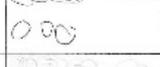
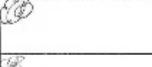
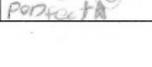
活動	子どもたちの様子
①ことばカード	<ul style="list-style-type: none"> ・知っている言葉を自信をもって答えることができた。 ・知らなかった言葉も、繰り返し行うことで、名前を答えることができるようになった。 ・授業後、自分たちで言葉カードを使い、問題を出し合う姿がみられた。
②早口ことば	<ul style="list-style-type: none"> ・促音や長音、幼音などに気を付けて正しく読めるように何度も練習することができた。 ・仲間に聞いてもらい、花丸をもらえるとうれしそうにしていた。
③チャレンジタイム	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールを確認するところでは、教師のマネをしながら、手を叩き、ルールを理解しようとしていた。 ・書き取りプリントを行うときには、手を叩きながら、表記を確かめる姿が見られた。
④おたのしみことばゲーム	<ul style="list-style-type: none"> ・教室中からひらがなを探すことを楽しんでいた。 ・探したひらがなを黒板にはり、仲間と考えながら言葉をつくることができた。
⑤がんばりシール	<ul style="list-style-type: none"> ・好きなシールを選んで貼っていた。 ・シールがたまると見せ合ったり、数を数えたりしていた。

・資料15 学習の記録を残すカード（裏表で作成）



ことばのたつじん はやくち 早口ことばカード



日にち	よんだもの	じぶんでれんしゅう	きいてもらった
4/6	かっぱん		
4/8	かっぱん		
4/26	かっぱん		
4/30	らっこ		
5/7	らっこ		
5/14	らっこ		
5/21	はららほ		
5/28	はららほ		
5/5	はららほ		
6/12	さんぽく		
6/20	さんぽく		

ことばのたつじん べんきょうのながれ

①ことばカード
 ②早口ことば
 ③チャレンジ タイム
 ④おたのしみことばゲーム
 ⑤がんばりシール

